

日本郭沫若研究会事務局

二〇一八年七月二〇日発行

郭沫若研究會報

第十九号 (総 No. 20)

目次

次号予告！ 郭沫若の周作人宛てハガキを公開	……………	本郭沫若研究会 会報編集部	1
郭沫若に於ける百花斉放の文学と書——百花斉放詩の書風を巡って	……………	松宮 貴之	2
郭沫若の帰国と廬山談話会準備工作の關係について	……………	廖 久明・著／新谷 秀明・訳	11
廖久明論文について	……………	編集子	19
成仿吾の欧州行（二）成仿吾の革命文学論・欧州へ向かう直前の活動	……………	成家 徹郎	20
中国の郭沫若研究の動向——郭沫若研究国際研討会に参加して	……………	岩佐 昌暉	29
「錐を投じた…」って？ 誤訳らしき箇所「三——『郭沫若自伝』を読む	……………	上野 恵司	30
金魚城——忠義祠——賢良祠について	……………	齊藤 孝治	31
書評 藤田梨那著『詩人郭沫若と日本』武蔵野書院 『女神』への新たなアプローチ	……………	武 継平	36
新刊紹介——林甘泉・蔡農主編『郭沫若年譜長編（1892～1978年）』	……………	岩佐 昌暉	38
全5巻 中国社会科学出版社、二〇一七年十月刊	……………		
執筆者紹介・編集後記	……………		39

次号予告！ 郭沫若の周作人宛てハガキを公開

日本郭沫若研究会 会報編集部

周作人と郭沫若との関係については、中国国内はいざ知らず、日本の学界では、従来、といっても一九四五年以後のことだが、まず言及されたことがないのではないか。その理由の最大のもの、戦後日本の中国文学研究の主流が中華人民共和国の政治や学術の動向の強い影響下にあったことが挙げられよう。中国では、周作人は対日協力者として、日中戦争終結後収監され、漢奸として長く公的活動を制限されてきた。そのため、研究対象として正面から取り上げられることはおろか、彼と同時代の文学者との関係を云々することさえタブー視されてきた状況が長く続いたのである。だが、文革後、周作人の文学者としての復権によって状況に変化が生まれた。周作人の作品の読み直しがすすみ、彼についての研究も盛んになってきた。その変化は日本にも及んでいて、近年、日本でも周作人研究が本格的に行なわれ始めている。

そういう流れのなかで、今年2月、謝冰心の詩集『春水』をめぐる学術集会が九州大学で開催された。九州大学図書館には「濱文庫」という中国戯劇関係の資料庫がある。元九州大学教養部教授だった濱一衛が中国留學中に収集した戯劇文献を中心にした資料庫である。その中に、濱一衛が周作人から贈られた冰心による『春水』の自筆原稿があった。それを発見したのが、九大言語文化研究院の中里見敬教授である。中里見さんは、長期にわたって「濱文庫」の資料整理に従事し、それを論文に纏めてきた人で、今回の発見はその仕事の延長線上にあるといっている。この発見を中里見さんが『中国現代文学研究叢刊』に発表、日中両国で大きな反響をよんだ。去年のことである。これをきっかけに、九州大学図書館が主宰して『春水』手稿と日中の文化交流 周作人、冰心、濱一衛 なる国際学術集会を開くことにしたわけである。

この集会には周作人の息子・周豊一のご子息・周吉宜氏も参加され、報告をされた。当会も中里見さんから頼まれて、集会参加者のために「郭沫若文学散歩」と称して郭沫若九大留學中の関連の場所を案内した。また、郭沫若と謝冰心についての編集子のエッセイを集会のパンフレットに載せてもらったりしたが、それが縁で、この学術集会の期間中に、周氏から周家に郭沫若が周作人に送ったハガキが保存されていることを知らされ、同時に郭家との連絡役を依頼された。その間の詳しい経緯は省略するが、周氏と郭平英前郭沫若記念館長とが連絡をとりあい、このハガキを公表すること、公表の方法は当会に委ねるが、当会の申し出により日本郭沫若研究会会報誌上とすることが決められた。

この間、周氏側の意向は弘前学院大学の顧偉良教授を通じて伝えられ、当会は直接周氏と連絡をとることはしていない。ハガキの公表を当会の会報上で行うことが決まってから、2月27日に顧氏を通じて周家からハガキのコピーが、また、郭平英氏からは、翌日、これまで知られている周作人と郭沫若の交流を示す文献資料が送られてきた。公表に当たっての解説の便宜のためである。

このハガキは、もともと本号の巻頭を飾り、関係文献やその解題、いくつかの関連論文とともに掲載されるはずだった。しかし、編集部の準備不足で今号の掲載に至らなかった。楽しみにされていただろう、周・郭両氏にお詫び申し上げます。

次号第20号は、「郭沫若から周作人宛てのハガキ公開、郭・周両文学巨匠交流特集号」として編集する。ハガキと、関係の文献、その解題、関連論文は、次号で大公開の予定である。ご期待を乞う。

郭沫若に於ける百花斉放の文学と書

—百花斉放詩の書風を巡って

松宮貴之

一 はじめに

—百花斉放期の郭沫若日記

二 百花斉放時の旧詩と書

三 詩集「百花斉放詩」の構成過程

A 全体構成と一九五六年時期の三首

B 反右闘争という転機と大躍進政策の頌歌

四 百花斉放詩の書風構造とその意味について

五 題辭と第三期郭体の使用条件

—トーンダウンと言う止揚

六 小結

一 はじめに

—百花斉放期の郭沫若日記

毛沢東は一九四九年、ソビエト連邦のヨシフ・スターリン支持（向ソ一辺倒）の下、中華人民共和国を建国したが、一九五三年三月五日にスターリンが死去し、後継者ニキータ・フルシチョフが一九五六年二月にスターリン批判を始めたことによつて、中共の政策はソ連との協調と独自性が交錯するようになる。

その流れを受けて一九五六年九月、中国共産党第八回党大会ではフルシチョフと歩を合わせ、採択された綱領に於いても「毛沢東思想」という文言が削除され、集団指導体制の確立が強調されて、毛の決定権が根底から揺さぶられた。

これを受けて、毛はリーダーシップの再強化を大衆運動によつて挑み、一九五六年五月二日、毛沢東は最高國務會議で「共産党への批判を歓迎する」として、「百花斉放、百家争鳴」所謂「双百」を提唱、百花斉放百家争鳴とは「多彩な文化を開花させて、多様な意見を論争する」という意味である。

毛沢東がこのような運動を始めた理由は、現在では概ね毛沢東が反中共分子を炙り出すための巧みな陰謀だったと見做す説が有力である¹⁾。

その当時、郭沫若は、一九五五年の中国社会科学院の前身にあたる中国科学院の哲学、社会科学科の設立、それとともに、全国の古跡名所を訪れる視察旅行が始まり、また日本訪問などがあつても、まだ北京で過ごす日々が多く、まだ中国全土視察は本格化していなかった時期である。

その一九五六年五月二日の翌々日、四日郭沫若は全国先進生産者代表會議で「向科学技术进军」という講話を発表し、各国の先進技術の中国への導入を訴えている。

また一九五六年八月二十四日の毛沢東の「推陳出新」方針の談話を受けて、二六日『人民中国』《百家争鳴》万歳！に於いて

认为“百家争鸣”具有它的时代性”，“由于历史发展的阶段不同，因而每个阶段，百家争鸣，的实质也各不相同”，指出：“在我们的时代中实现，百家争鸣，是比历史上任何时期都有更有利的条件”，并分析了具体条件和措施，从而断定：“只要我们不断努力，我们的，百家争鸣，将永远继续下去”。

（大意）「百家争鳴には、その時代性が備わっている。歴史の発展段階は同じではないから、それぞれの段階の百家争鳴の実質も同じではない」とみなし、以下のように指摘した「我々の時代に百家争鳴を実現するのは、歴史上のいかなる時よりも有利な条件がある」。同時に具体的な条件と措置を分析し、そこから「我々が

不斷に努力を続けさえすれば、我々の百家争鳴は永遠に続いていくであろう」と断定した。

と述べ、そして翌月九月六日には、

发表《“百家争鸣”可以推广》，就“百家争鸣”的方针是不是仅限于学术界等问题，答《工人日报》读者问。认为“百家争鸣”主要是发展学术研究方针”，但“在实际工作中和在技术上都都可以适用”，问题于“怎么来进行，百家争鸣”，怎么通过，百家争鸣…而求得进步”。

（大意）『百家争鳴は広めていい』を発表し、「百家争鳴」の方針は学界だけに限られるのか等の問題について、《工人日報》の読者の質問に答え、以下のように表明した。「百家争鳴」は主として学術研究を発展させる方針である。だが、実際の工作と技術面にも適用できる。問題は、どのように百家争鳴を進めて行くのか、「百家争鳴」を通してどのように進歩を求められるのか、という点にある」と。

と表明している。

そして、百花運動は当初盛り上がりなかったため、党外人士や知識人に積極的に参加するよう呼びかけ、二月には、毛は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」という講話を行い、党に対する党外からの批判を歓迎すると表明した。

さらに一九五七年三月六日から十三日にかけて全国宣伝工作者会議でもさらに中国共産党に対する批判を促した。

かくて、知識人の間で中国共産党に対する批判が徐々に始まり、次第にその批判は激し、知識人たちは共産党の「党天下」や、最高指導者を名指しで批判するようになる。

また、始めは批判の場合は壁新聞や座談会に限定されていたが、拡大する潮流に対し、一九五七年五月十五日、毛沢東は、「事情正在起变化」を撰文し「右派」に対する批判も行うように奨励した。

その前日の十四日、郭沫若は、北京中国画院成立大会で、百花齐放を称える漢詩を発表し、二三日の日記によると、

上午，往北京飯店，出席中国科学院学部委员会第二次全体会议，并致开幕词，指出“能够领导制订科学远景规划的党，一定能够领导我们实现远景规划”…强调“贯彻学术性的百家争鸣，是促进学术发展的原动力”。

（大意）午前中、北京飯店に赴き、中国科学院学部委员会第二次全体会議に出席。その開会のあいさつで、「科学の将来計画を定めるよう指導できる党は、必ず我々を指導して将来計画を実現できる」と述べ、「学術上の百家争鳴を貫徹することは、学術発展を促進する原動力である」と強調した。

とあり、三十日には、

下午，在中国科学院学部委员会第二次全体会议上致闭幕词，肯定这次会议展开了争鸣，体现了当前的时代精神，初步发扬了学术民主，希望既不要盲目自大，也不要盲目自卑，在重视自己的劳动的同时，更要重视别人的劳动。

（大意）午後、中国科学院学部委员会第二次全体會議で閉会のあいさつを行う。今回の會議がさまざまな議論を繰り広げ、現下の時代精神を体现し、初步的に学術上の民主を發揚したことを肯定した。また盲目自大、盲目浅薄にならず、自己の成果を重視すると同時に、それ以上に他人の働きの成果を重視するよう希望すると述べた。

とあり、ここではまだ学術界の百家争鳴、民主性を唱えている。

しかし、一九五七年六月八日、人民日報は「这是为什么？」という「右派分子が社会主義を攻撃している」という毛沢東が執筆した社説を掲載。これによって党を批判した知識人たちは、毛沢東によって社会主義政權破壊を画策した「右派」と見做されるようになる。知識人

の肅清運動である所謂「反右派闘争」は、この時から始まったと言われている。

郭沫若の六月二六日の日記では、

就回击资产阶级右派分子进攻等问题，对《光明日报》记者何炳然发表谈话，认为，无罪者的言者无罪，有罪者的言者还是有罪者，对资产阶级右派分子必须坚决回击，希望他们不要自绝于人民。

(大意)ブルジョワ階級右派の進攻に反撃する等の問題について《光明日報》記者、何炳然が談話を發表し「無罪の發言は無罪、有罪者の發言は、やはり有罪」と見ている。ブルジョワ階級右派には必ず断固として反撃しなければならず、彼らが自ら人民と手を切る(絶縁すること)のないよう望む。

と述べている。これが、郭沫若の右派闘争期当初のスタンスとなるのだろう。

二 百花斉放時の旧詩と書

郭沫若の当該期の旧詩の作は、『郭沫若旧体詩詞系年注釈』に拠ると、一九五六年は六首、一九五七年は十首と少なく、一九五八年以降増産されている。これは、百花斉放期は作(旧)詩を作る旅行の機会が少なかったことと、行政的な多忙さによるところが大きいであろうが、一九五八年後の旧詩の増産は、大躍進政策に伴う視察旅行に便乗して、文化面にも何らかの予算が付けられたことが推察できる。

それでは、百花斉放期の旧詩を見て行くと、

まず一九五六年十月一日に發表された「文匯報繼續出版 用陳叔老韻」には、

建国七年慶 普天万歳声 続編文匯報 敢作驚人鳴 愚者一籌慮 秀才半紙情 集思忠 益益 日久自成城

(大意)建国七年の慶賀、天下に万歳の声が響き渡る。続編「文匯報」、敢えて人を驚かせる。愚者は小さなことに慮り、秀才は半

紙で情を伸ばす。忠誠への思いは益々広がり、日は長く自ら城塞を築く。

とあるが、この和された詩は、陳叔通の

国慶歡騰日 飛來第一声 發揚八大會 貫徹百家鳴 取譽群流匯 提高再厲情 從茲文教益 賴此作干城

(大意)国慶を歡喜する日、飛び來たる第一声。八大會を發揚し、百家争鳴を貫徹する。すべての情報が流れ集まり、凄まじい情熱を高めてくれる。ここから文教は益し、これによって城塞を築く。である。次に一九五六年十一月一日の「賀張元濟老先生九十寿辰」では、

興國禎祥見 老成今道行 百年曆甘苦 七載淨風塵 文化高潮至 和平普海親 百家鳴鼎盛 翹首壽斯人

(大意)國家が振興をみせ、老いて今の道を行く。百年の甘苦を重ね、七年で風塵を淨めてくれた。文化の高潮は、遍く海を和平に導く。百家争鳴は盛んになり、首を上げてこの人を寿ぐ。

とある。そして一九五七年五月の「贈北京中国画院」(図1)では、

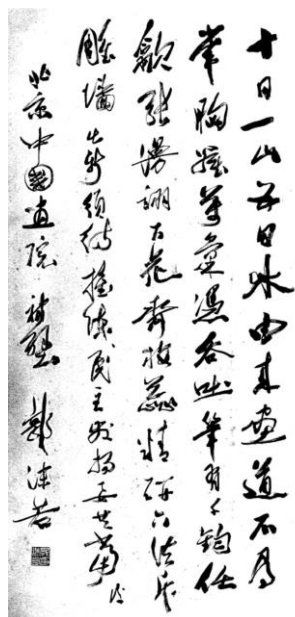


図1

十日一山五日水 由来画道不尋常 胸羅萬彙憑吞吐 筆有千鈞任欽張 漫調百花齊放蕊 出新須待推陳後 民主發揚要共當

(大意) 十日で一つの山、五日で水を、もともと画の道は尋常ではない。広範な知識、抱負や万物が、のみはきし、筆には千鈞の重みがあつて、一開一合にゆだねられる。ほしいままに百花斉放のおしべをほこり、古いものから精髓を取り出し新たに発する。民主の發揚は、共に当たるを要す。

とあり、反右闘争がすでに始まっている一九五七年九月の「贈香港大公报」でも

為民喉舌誇天職 報国精誠万感通 大陸風伝森大厦 長江電見架新虹 百花齊放文化蕊 七載双成革命功 奮鋒繼今循宇内 仍期為善与人同

(大意) 民の喉舌と為るを天職と誇り、報国の忠誠はすべてに通じる。大陸の風は森やビルに伝わり、長江の電力は新たな虹をかける。百花斉放は文化の蕊、七載双つ「百花斉放」芸術上の繁栄と百家争鳴＝學術上の繁栄＝ながら革命の功と成る。奮鋒今に継ぎ、宇内を循(めぐ)る。善行を人にとともになす事を期している。

とあり、未だその基本姿勢を貫いている。但し一九五七年の「卜算子 為文君公園題詞」では、

文君当壚時 相如滌器処 反抗封建是前驅 佳話伝千古 会当一凭弔 酌取井中水 用以烹茶滌塵思 清逸諒無比

(大意) 文君壚に当たりし時、相如器を滌^{あら}いし処(卓文君と司馬相如の故事が典拠)富豪の娘司馬相如が親に背いて貧しい卓文君に添い、居酒屋を開いた話。史記にあり、次の「反封建」はそのことを指す。封建制への抵抗への先駆け、その逸話は千年も伝わっている。今は古人を弔い、その井水を汲む。今はお茶を煮るに使つて俗念を淨め、その清涼感は無比である。

とあり、右派を牽制している。

そして私は当時の旧詩の書相については、拙稿「抗日勝利から中華

人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理」に於いて²、

：つまり「郭体」の確立の背景には、政治キャンペーンという目的があつて、そのプロパガンダ的性格が決定的な役割を担い、とりわけ、幾多の書風遍歴を経て、「百花斉放」時代に完成したといつて過言ではないだろう。

つまり所謂「郭体」は、単発としては、未成熟ながら早く抗日戦争期から見られたが、感情の起伏の表現たる用筆の伸縮の激しさ、最高度の気魄が盛り込まれるようになったのは、この「百花斉放」時であり、知識人の復権という精神的な興奮を背景に、この確立された様式が常態として、次の大躍進時代にまで引き継がれることになるのである。

と述べ、さらに「郭沫若の書、所謂「郭体」の規定と成立過程及びその時期を巡つて」³に於いて、

ここまで見てきたように郭沫若の行草、所謂「郭体」は、実際に二度の変転を経て、形成されたものと言えるだろう。

その一つは一九三〇年代後期の抗日全面戦争期に形成され(第一期郭体)、もう一度は、一九五〇年代後期の百花斉放期に変貌を遂げたと言える(第二期郭体)。

そしてその内実についてまとめれば、「第一期」は、口語様式の文語様式への流入体、「第二期」は、「第一期体」に再度文語様式が盛り込まれた体と定義できよう。と定義した。

図1の「贈北京中国画院」の書、また図2の「百花斉放 推陳出新」、さらに図3の自作詩

百花斉放百鳥鳴 貴在推陳善出新 看罷牡丹看秋菊 四時佳氣永如春 郭沫若

图 2

图 3

とある書風から、私が従来指摘してきた要素が汲み取れると言えらるう。

A 全体構成と一九五六年時期の三首

一九五八年四月九日付の後記には、この詩集は三月三十日に正式に開始し、一九五六年の作三首（牡丹／芍药／春兰）以外は、十日で書

(大意) 私らのことをなんと、花の奴隷」と貶める人がいるが、我らはこのような侮辱を受けたくない。くやしい生活を何年過ごしてきたか知れないほどだが、今や、奴隷は立ち上がり、人民が主

人公となった。今日、花咲きひらき、私たちは以前に増して元気になった、

咲き開いた二花一葉はすべて人民のためだ。チヨウ達は午睡の夢から目覚めてずつと軽やかに飛びまわり、ミツバチ達の甘い蜜は前よりずつとさわやか。

さらに「春三」では、

我们也讨厌人们夸说什么“王者香”，也讨厌人们说我们是“花中君子”，其实我们生长在山地的泉水边，樵夫和林农们本是我们的好邻里。脉脉的清泉浸出自幽谷的岩隙中，空气是十分清冷，苔藓是十分蒙茸。我们深愿回到故乡，倾听流泉的琤琮，在亲爱的邻里中高唱着东风的歌颂。

（大意）私らは人から「王者の香り」などと褒められるのはイヤ。「花の君子」だと言われるのも嫌いだ。実を言えば我等は山地の泉のほとりの育ち、もともとときこりと農夫の隣同士。清らかな泉水が途絶えることなく奥深い谷間の岩の隙間からにじみ出て、空気はひんやり、こけにやわらかく覆われているところ。故郷に帰りたいと強く願い、さらさらと流れる泉の音に耳を傾け、親愛なる古里の隣人の中で東風の褒め歌を高らかに歌っているのだ。

これらの三首について賈振勇氏は「郭沫若与反右运动」⁵の中で、（大意）郭沫若の言行は、とても慎重で、賢い政治態度の表明である。旗幟鮮明で、断固として応えて、またあいまいで、左右同源である。周知のように、一九五六年夏に、郭沫若は奮して百花を植え、百首の詩を選出し、毛沢東のために興を添えると同時に、毛沢東に対し「百花齐放、百家争鸣」方針に積極的に応えた。しかしただ三首だけしか残さなかった。：

この三首の詩を見ると、《牡丹》詩の初めに、我们并不是什么，花中之王，也不曾怀抱过所谓“富贵之想”と言い、《芍药》詩

の中で、我们也讨厌人们夸说什么“王者香”，也讨厌人们说我们是“花中君子”，だと言う。詩歌の初めに否定句式でなく、否定するであつて、まるで謙虚な声明で、また理解が得られないため弁解するようでもある。全体を見て、詩句の現れた心理状態は慎重であり、自らの清らかさを挾んでいる。「芍药」では、心理状態の変化の興奮を“有人竟贬低我们为‘花之奴’”，我们都不愿受这样的侮辱。委屈生活过了不知多少年，如今是奴隶翻身，人民作了主。”と述べている。少し謙虚な弁明から、また翻つて精神奮起する。思想と情緒を述べている間、何度ためらいながらも、毛沢東と党と前進する文人知識人の実際の心理状態と一つになる。もしも、詩情がここで終わつていれば、おしまい。しかし、《牡丹》の最後の一節は、それなのに“百花齐放”の精神に背くようである。“尽管被人称为国色与天香，尽管有什么魏紫与姚黄，花开后把花瓣散满了园地，只觉得败坏风光，令人惆怅。”と花が咲き散る興さめさせた主旨であるが、“百花齐放”の方針、政策の歌であるのは、それは興さめなのか？これは予見なのか？不満なのか？指摘なのか？それとも政治的嗅覚に敏感なせいなのか？上述の詩を解釈して、行間からひそかに郭沫若の政治に対する心理状態を少し解することができると述べ、その三首はその百花齐放政策に対する郭沫若の政治的洞察によつて、曖昧な心境が吐露されていたとする見方であるが、当時この三首の他に新詩が残されていた可能性や、またその中で反右闘争、大躍進政策への後付けにこれら三首が敢えて選定された可能性も否定できないのではなからうか。続いてその詩をさらに見て行きたい。

B 反右闘争という転機と大躍進政策の頌歌

百花齐放の詩は、その題名とは裏腹に、その後の反右闘争や大躍進政策時の詩が内容としてもこちらがメインであり、後に一九五九年に

上梓される書の装いもこの詩文に相應しい様式が模索されたと見て大過なからう。

例えばその詩を見ると、先ず反右闘争の詩として「石榴花」では、我们是灌木，和杜鹃是同科，叶似琵琶而细长，花红如火。也有淡红，淡紫，深黄或者纯白，数朵开在枝头就像是一朵。我们能耐寒，能生活在高山，北京应该多，却是大大不然。同志，为什么不敢栽培我们？我们是多么愿意…向党交心肝！

(大意) 我々は灌木で杜鵑つじと同科、葉は琵琶に似て細長く、花は紅く火のようだ。うすい赤、うすい紫、濃い黄色、真つ白のものもある。数枝が枝先に咲くと、まるで一枚の花びらのよう。我等は寒さに強く、高山で生きられる。北京には当然多いが、我等とは大いに違う。

ねえ、同志。どうして我等を育てる勇気がないのですか？我等は、党に心を差し出したと、こんなにも願っているというのに。

とあり、右派知識人に代わつて党に融和策を求め、さらに「郁金香」では、

波斯诗人曾经把我们比作酒杯，但他错误的只用来自我陶醉。我们今天是要为大跃进而干杯，高呼中国共产党和毛主席万岁。黄河之水今后不会再从天上来，高峡出平湖，猿声不再在天上哀。最大的变异要看到黄海变成青海，全民振奋，真正正是大有可为。

(大意) ペルシャの詩人が、かつて我等を酒盃にたとえた。だが彼は、誤つてそれを自己陶醉に使つただけだった。我等は今日大躍進のために乾杯し、中国共産党と毛主席万歳と高らかに叫ぶ。黄河の水は今後はもう天から来ないだろう。『李白の詩「将進酒」の詩句を受けている。黄河の激しい水流を水が天から来るようだと描写した。ここでは、黄河の治水が完成すれば、水流は穏やか

になるだろうと言っている」長江の深い溪谷を出れば平らな湖で猿声が天上に哀しく響くことは、もはやあるまい。最大の変化は黄色く濁った黄河が澄んだ水の流れる青い海になったのを目にできるだろうこと。全人民が奮い立とう、この大躍進運動は、ほんとうに大いなる可能性があるのだ。

と総路線、大躍進の頌歌となっている。

百花齊放詩には、これらのような政治的寓意を込めた詩が多く、一九五八年時の郭沫若の心境を、如実に物語っていると云える。

四 百花齊放詩の書風構造とその意味について

郭沫若日記によれば、一九五八年三月末日に百花齊放詩の小序を書き、その四月に殆どの詩を発表、六月に後記を書き上げている。

そしてそれが出版されるのが一九五九年四月、江蘇文艺出版社を先駆けとして陸続と出版されている。そしてそれが郭沫若の書とともに出版されるのは、一九六一年一月に榮宝齋からで、これが実際に書かれたのは一九六〇年の秋、日記に依れば九月六日となっている。

百花斎放詩が書品ではなく下書きされたその様式は、当時の管見の資料から推せば、恐らく当時日常で通用されていた、第一期郭体、日

芍药

有人竟賤視我們是「花之奴」，
我們卻不願受這樣的污辱。
委曲生活過了不知多少年，
如今是奴隸翻身人民了！

其間在今天，我們是倍有精神，
放出的一花一葉都是為了人民。
蝴蝶們的午夢睡得更更加香甜，
金蜂們的蜜汁吐得更加清淨。

迎春花

春天来了，我们的花园将比往年
会更加的小，喇叭声满枝，
花儿在期长，或许是我们的好花
缺少香气，说真话也有点单调。

不過，我們的校務還相當地柔軟，可以讓園藝家們替低處的樓梯，嫩綠的葉子，也不容易改變顏色，在缺少花的時期，勉強可以充數。

蒲公英

在轉瞬間會把黃色變成銀
銀色的種子是一團空際部隊
但我們是向大地中投下生命

中國大夫知道我們的個性，他們會用我們來治病救人。幸好我們實在是熱愛中國，我們是大地之子，別名叫地丁。

語様式の文語様式に流入された態様であつたと思われるが、この榮宝齋から出された書法の様式は、郭体として異色な様相を呈している。

例えば、図4の『芍药』は先に見た一九五六年時の百花斉放の詩であり、図5の『攀枝花』(攀枝花在岭南就叫作木棉，岭南人又称我们为英雄树。高大的乔木戴着满着大红花，具有生产英雄那样的风度。然而木质疏松，却没有什麼作用，结出的棉絮也和棉花大不相同。幸喜四



図5

川有处攀枝花产生铁矿，地以花命名，使我们也沾了大光。)

は嶺南では木綿^{きわた}といい、嶺南の人は我等のことをまた英雄樹と呼ぶ。

高い喬木には大きな紅い花がびっしり咲き、英雄を産むような風格を備えている。だが木質は緩み、なんの役にも立たない。生まれ出る棉状の絮や綿花とも大きく異なる。幸いに四川には攀枝花と言うところがあり、鉄鋼を生産し、ここは花の名を地名としていて、我等もおかげを蒙っている。」は大躍進政策の頌歌であるが、同じ様式に総括されており、百花斉放詩様式の確立を意味している。

その書風を具さに分析すると、日常の小字、それは当時通用していた第一期郭体に、例えば一九四〇年代に書かれた文語体、といつても図6のような謹直で伝統的な小楷の要素が加わり新たな様相を呈している。ここで少しく郭沫若の小字、つまり日常時に用いていた書風を概観すれば、一九三〇年代は草書主体の丸文字、癖文字とでもいう

ものであつたが、一九四〇・一九五〇年代と次第にそこに文語的な要素が加わってくる。無論そこには、第二期郭体に見られるような艶やかな伸縮は見られない。それは鑑賞者を意識することが少ないが故に当然であり、小字の小筆、小紙、鑑賞物的要素の少なさに起因するものと考えられる。

しかし、この百花斉放詩は、小字と雖も鑑賞物である故に、そこに日常とは一線を画する要素が必要だった。そこに用いられたのが、伝統的な小楷の技法であり、それによつて気品を高めていると言える。

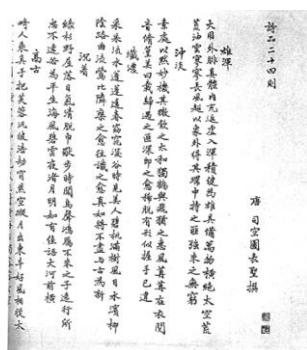


図6

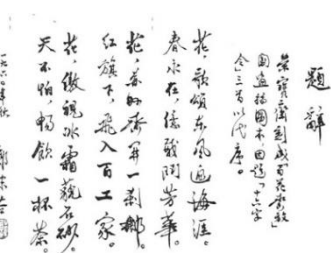


図8

つまり、日常化されていた第一期郭体の様式にさらに伝統的な小楷の要素が上積みされたのが、この百花斉放詩様式と言える。

口語詩の鑑賞物たる書として、先例を挙げるならば、一九四二年の書「水牛讚」(図7)があるが、それは元来の口語様式をベースにし、さらに鑑賞物たる故に、幾らか文語的な華やぎが盛り込まれている。それに比べ、これらの百花斉放詩様式は逆に華やぎを抑制した緊張感があり、その心境が郭沫若の百花斉放詩への総括だったと考えられ、その傍証として図8の題字は、第三期郭体(第二期を内包した)あつて、郭沫若は、この百花斉放詩を第三期で書くことと思えば書けた。そこを書き分けた原因を考えねばならないだろう

五 題辭と第二期郭體の使用条件

— トーンダウンと言う止揚

私は一九五〇年代後期から六十年代前期にかけての郭沫若の歴史学行政・視察旅行と詩、そして書について分析する内に、郭沫若の詩は、常に記念詩的な意味を担っているが、一九五〇年代後期から一九六〇年代の新様式サイズの作品について言えば、共產主義のスケールの大きさが反映するという社会を構成する要素であった反面、彼自身の生活を構成する要素でもあったという側面からの考察が、次の研究の課題だと考えていた。つまり百花斉放、反右闘争、大躍進政策という時代の流れの中で、書という分野はつねにその書人の心の速度でもあり、時代の速度でもあり、第三期郭体を改めて簡易に定義すれば、第二期と第一期の郭体の止揚した姿と言える。

次は、その定義を深めるために、百花斉放時の文学や思想の変遷を中心とした、彼の内面の世界をさらに掘り下げる研究を課題とすれば、郭沫若の第三期郭体は、ほぼ百花斉放から反右闘争へと移る時、管見では一九五八年にその姿を現す。

さらに郭沫若は、先ほども述べたように、旧詩の作は、一九五六年は六首、一九五七年は十首と少なく、一九五八年以降増産されている。

また、それは大躍進政策に伴う視察と関連するのだろうか、この第三期郭体は、この百花斉

放と表裏の關係にあると言えるだろう。

これは郭沫若の思想的傾向でもあるが、常にダブルスタンダード
両刀使いであつて、時の情勢によつて、思想が左右に揺れると
言えるだろう。

つまり、一九五六年期の百花斉放開始期は、主に学術界の解放の方面に力を入れ、文学的には自重していたように思われる。または、当時の詩作を葬り去った可能性も考えられる。

そして、一九五八年の反右闘争後の大躍進政策に於いて、書法的に言えば、第二期郭体がややトーンダウンと言う形で、再度、右から左と向かい止揚した姿が、第三期郭体の真相とは、言えないだろうか。

六 小結

中国共産党の政治キャンペーンである、「百花斉放」政策は、時間の経過の中で、その題目は変わらずとも、その内実の意味合いが変質していった。そしての変貌を、もつとも見事に体現した人物の一人が、この郭沫若に他ならない。

一九五六年時は、学芸の解放に歓喜し、一九五七年時には反右闘争へ玉虫色の模糊たる様相を呈するようになり、一九五八年には、大躍進政策を賛歌する。

そして一九五九年九月二六日の日記には、

发表《进一步展开“百花齐放，百家争鸣”》，初步总结贯彻“双百”方针的经验。认为“要使‘百花齐放’，则‘推陈出新’正是最具体的方法，要能‘百家争鸣’，那应包含有‘实事求是’的步骤”。

〔大意〕「百花齊放、百家争鳴」をよりいっそう展開せよを發表し、「双百」の方針を貫徹実行した経験を初歩的に総括した。

「百花」(さまざまな芸術の花を「斉放」(一斉に咲かせようとすれば、「推陳出新」こそが正に最も具体的な方法である。もし「百家」(さまざまな学術)の「争鳴」(活性化)を可能にしようと



図
7

するなら、「实事求是」（事実即して真理を求める）の段取りをふまなければならない、という認識を述べた。
とある。

この「推陳出新」とは、「古きを推し量り、新しいものを出だす」「古い糟粕をすて、新しいものを出だす」の両訓が可能であり、これも時局によつて使い分けのできる造語である。

またこの「实事求是」の精神は、清朝考証学の空理空論（理空字）を批判する思想を基とする思想でもあり、清朝の当時、その思想の延長として書の美学、質実な四角い楷書が尊重されるという流派を形成したが、所謂一九六〇年の郭沫若の書様式、「百花斉放詩様式」に認められる楷書の方筆的要素は、その意識を大躍進政策の反省として百花斉放詩に盛り込んだとしたとも考えられよう。

政治とは常に流動的で玉虫色であるが、政治や文学と違い、書は常にその時々的事实に正直であり、その姿がその時の真実を現していると言えるだろうか。

注

- 1 天児慧『中華人民共和国史』 岩波新書 一九九九年 ユン・チアン『マオ 誰も知らなかった毛沢東』 講談社 二〇〇五年上巻
- 2 拙稿「抗日勝利から中華人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理―日中戦争終結から一九五〇年代後期の様式変遷と所謂「郭体」の確立時期を巡って―」『京都語文』第二十三号 二〇一六年十一月
- 3 拙稿「郭沫若の書、所謂「郭体」の規定と成立過程及びその時期を巡って」『書法漢学研究』(二十一号) 二〇一七年七月 有限会社アートライフ社
- 4 刘涵华「复杂心态的曲折流露― 郭沫若《百花齐放》的重新解读」『贵州社会科学』二〇〇三年五月
- 5 贾振勇「郭沫若与反右运动」『粤海风』二〇〇八年一月

郭沫若の帰国と廬山談話会準備工作の関係について

廖 久明・著
新谷秀明・訳

中国近代史において、廬山談話会は次のようなたいへん重要な意義を持つている。

一、「国民党政府が対日抗戦の道を歩むことにおいて廬山談話会は積極的役割を果たした」

二、「廬山談話会は抗日戦争期の各党派や各界代表人物が国策を協議した最も早い方式で、のちに国民党参政会の設置が議論されるさきがけとなった」

三、「廬山談話会はいくつかの主張と提案をおこなったが、その中には正しく世のためになる意見が少なからず、国民党当局の内外政策の再調整と確立に役だった」。¹

郭沫若の帰国問題を考察すれば、以下の二つの事はどちらも廬山談話会の準備工作と関係があることがわかるだろう。

一、当時行政院政務処長（当時の行政院院長は蒋介石）の職にあった何廉が一九三七年三月前後に郭沫若を「廬山で行われる国事問題を議論する会議の参加者」名簿に入れたこと。

二、一九三七年五月一七日、何廉は郭沫若の帰国を許すよう再度蒋介石に提案したこと。

郭沫若帰国問題と廬山談話会準備工作の関係を明確化することに

¹ 于道余『七七事变後の廬山談話会を論ず』『档案与史学』1995年 第3期

よって、郭沫若の帰国において「共産党の功績は不足できない」²といった説は疑う余地があることを角度を換えて証明できるだけでなく、人々の廬山談話会準備工作に対する認識不足を埋め合わせることもできるのである。

一、一九三七年三月…何廉が郭沫若を参加者名簿に入れる

このことについて、何廉は回想記の中でこのように述べる。

三月の前後、孔祥熙が英国出張に出発する前、委員長は翁文灝と私に上海に面会に来るように命じた。それ以前には、委員長が郷里から南京に来て国民党中央執行委員会の会議に出席した際、私たちに「廬山でおこなう国事を議論する会議に政府は誰を招待すべきだと考えるか、その名簿を準備せよ」と指示を出していた。私たちは各界の人物を記載した名簿を策定した。上海へ行き委員長に会った時、私たちはこの名簿の草案を提出した。私は名簿に郭沫若の名があったことを覚えていたが、彼が共産党員かどうかは私たちにははっきりとわからなかった。委員長は郭沫若の名を見て、「おお、これはよい。この人物について私は十分わかっていいる」と言った。委員長は私たちに、この人物は今どこにいるのかと尋ねた。私は、一九三三年に東京で彼に会ったことはあるが、現在どこにいるかはわからないと答えた。名簿には上海の帮会の頭目杜月笙の名も入れたが、委

員長はそれについて喜んだ様子であった。³

「委員長が郷里から南京に来て国民党中央執行委員会の会議に出席した際」という記載から知れるのは、蒋介石は奉化から南京に戻る以前にすでに、廬山で「国事を議論する会議」を開催する予定をしていたことだ。

いま、私たちは『蒋中正總統檔案…事略稿本』（以下『事略稿本』と称す）に基づいて蒋介石が翁文灝、何廉に「廬山でおこなう国事を議論する会議」の名簿の起草を指示した時間を考察してみよう。

一九三六年十二月二十六日、「午前九時四十分、（蒋中正）公は夫人および宋子文、張学良とともに洛陽から飛行機で飛び立ち、昼の一二時二〇分に南京に着いた」。

二月三〇日、「次の各項目に注意すべきであることを考えた。一、日本およびソ連に対する態度。二、共産党に対する方針。三、力行社に対する方針、新たに組織する幹部に対する方針」。⁴

一九三七年一月二日、「公は午前七時半に各同志とあらゆる手はずを整えたのち、八時半に南京から飛行機で郷里に戻った」。

一月四日、「公は連日共産党に対しての策略を考え、それを日記に特記した。共産党に対して逃げ道を与えるべきであり、相当な条件でこれを受け入れるべきだが、範囲だけは厳守させねばならない、とのよし。また、幹部の再組織、各党各派と各界名士との融和、国民党代表大会の期日、政府の改組および党内の年長者や親類縁者の配置等の問題を考えた」。

2

沈鵬年『共産党の功は没すべからず——再び郭沫若の帰国問題を論ず』（『行雲流水記往（上）』上海三聯書店，2009年，183～184頁）。これについて筆者は『郭沫若帰国抗戦縁由考』（『中国現代文学研究叢刊』2013年第9期）に自分の考えを述べた。

3

朱佑慈、楊大寧、胡隆昶訳『何廉回憶録』（北京 中国文史出版社，1988年）124頁

4

高素蘭編注『蒋中正總統檔案…事略稿本』第39卷（台北 国史館，2009年）618～659頁

二月二日、「二〇時半、慈庵から出発する。一二時半、新昌の大仏寺に到着、実にすばらしい景勝地である。午後四時過ぎに杭州に到着」。

二月一〇日、「公は昨日杭州から上海に到着した」。

二月一四日、「午前、上海から飛行機で南京に戻る」。

二月一五日、「本日第五期中央執行委員会第三回全体会議が開幕するが、公は背中の痛みのために参加しなかった。午後、戴伝賢、居正、葉楚傖、邵力子、陳布雷らと会見、提案と宣言のことを相談した」。

三月六日、「夜、軍艦に乗船し上流へ向かう」。⁵

これらは何廉の回想文と突き合わせると、以下の二点が推測される。一、遅くとも一九三七年一月四日には、蒋介石は「各党各派と各界名士の融合」を目的とした廬山談話会を実施する問題をすでに考えており、その日の「公は連日考へ」と一九三六年十二月三〇日の記載から、我々は少なくとも、蒋介石が廬山談話会の実施を考えたと最初の時間を一九三六年十二月三〇日と確定することができる。

二、蒋介石が翁文灝、何廉に「廬山で実施する国事を議論する会議」の名簿起草するように指示した時間の範囲は一九三七年二月一日から三月六日までであり、当時翁文灝が行政院秘書長、何廉が政務処長であったため、行政院院長の蒋介石が南京に戻った時、彼らがすぐに謁見するのは当然であった。したがって、蒋介石が翁文灝、何廉に参加者名簿を起草するよう指示した時間は一九三七年二月中旬の後半である。

では、翁文灝、何廉が郭沫若を参加者名簿に入れた理由を考察してみよう。

一九三七年二月二日、国民党第五期三中全会が幕を閉じた。閉会后、蒋介石は言論開放、人材集中、政治犯の赦免について中央社記者

の質問を受けた。人材集中という問題に回答する際、蒋介石はこのように述べた。

政治の面から言えば、中央は十年来、党外の有能な人材を招聘したことは数え切れないほどある。事實上、民国十三年以前の各党派に対してつとに蔑視することなく、いわんや排斥する意図などなかった。とりわけ国内の眞の学識と愛国の情熱を持った知識人、そして大学教授に関しては、いっそう虚心に物事を相談し、極めて尊重していた。そして彼らが教育文化、政治・経済の各種建設においてできるだけ貢献し、有用な青年を育成し、建国の大業を成し遂げることを切望した。よって、人材集中ということは中央の一貫した方針であると言つてもよく、今後はその充分な実現をいっそう期さねばならない。およそ眞に国を愛し同じ目標のもとで国家のために奮闘する者は、当然ながら尊重され、かつまた歓迎されるべきである。

翌日、『大公報』は「蒋委員長は重要談話を発表した…中央は言論の自由を尊重し人材を集中させ建設に力を尽くし、政治犯が過ちを悔い改めやり直すならば寛容な処分を与える」と題して蒋介石の談話を発表した。ある学者は、傍点を付した部分の文章が「廬山談話会を実施する理由と見なすことができる」⁶と考えている。

先に『事略稿本』の記載に基づき蒋介石が翁、何に参加者名簿の起草を指示した時間は一九三七年二月中旬後半であると推論したが、蒋介石が重要談話を発表した時間は二月二日であり、両者を結びつけ

⁵ 王正華編輯『蒋中正總統檔案・事略稿本』第40卷（台北：国史館，2010年）8～242頁

⁶ 徐希軍『理想主義…胡適國際政治思想研究』（合肥：合肥工業大学出版社，2008年）111頁

ると、指示した時間を一九三七年二月・下旬と確定できる。考証に基つくと、翁文灝、何廉が参加者名簿を蒋介石に対面提示した時間は一九三七年三月八日から三月九日午前までのどこかの時間である。⁷

ある研究者は、国民政府が胡適を廬山談話会に招致したことは「象徴的な意義を持つ」⁸と指摘する。胡適と比較して言うなら、郭沫若はかつて「今日の蒋介石を見よ」を書き、南昌蜂起にも参加したことがある……もし郭沫若を帰国させ廬山談話会に参加させることができれば、国民政府は今確かに「過去のわだかまりを捨てともに国難に向かう」つもりであることをまちがひなく天下の人々に示すことができる。その象徴的意義は胡適よりもはるかに大きいはずである！蒋介石が翁文灝、何廉の起草した「廬山で実施する国事を議論する会議」参加者名簿に郭沫若の名があるのを見たあと「おお、これはよい。この人物について私は十分わかつていいる」と述べたのは、これが理由であるに違いない。

二、一九三七年五月一七日：何廉が郭沫若帰国の許可を再び蒋介石に提案する

一九三七年五月一日、郁達夫は郭沫若に次のような手紙を出した。

今朝南京から電報が来て、手紙を出すように言われた。委員長はあなたを頼りにしているので、速やかに帰国されたしとのことである。私は自分の奔走が功を奏したこと喜びにたえず、

⁷ 廖久明『郭沫若帰国と何廉の果たした役割について』、『新文学史料』2015年第3期

⁸ 徐希軍『理想主義…胡適国際政治思想研究』（合肥、合肥工業大学出版社、2008年）112頁

さつそく航空便一通、普通便一通を出す。一方で南京に打電し、まず指名手配を取り消し、それから一日も早く出発できるように日本への渡航費を多めに送金してくれるようお願いした。強い隣国の圧力やまず、国家の危機が間近に迫っている。大団結により外患を制御することは、目下のところ不変の条理である。兄はきつと私が余計なことをしているとは思なさないであろう。この手紙が到着する頃には、きつと南京は直接兄に對し意思表示しているだろう。即日旅装を整え、とにかく帰国の途についてくれたまえ。また出発の前に電報で連絡をいただければ、私は上海であなたを待ち、南京に同行する。この事の経緯は一言では言い尽くせない。お会いしてからお話ししよう。⁹

この手紙の中で郁達夫は自らの「奔走が功を奏した」ために「喜びにたえない心情を抑えがたかったが、これは郁達夫がそれまでに「奔走」した困難の程度と関係がある。

一九三六年末、日本政府の「対支文化事業」（あるいは「東方文化事業」と訳される）基金の援助により、郁達夫は日本へ行っている。

¹⁰ 日本にいた期間中、二月中旬、一月二十四日、一月二十九日の郭沫若との三度の接触は郁達夫にきつと次のような印象を与えたであろう。祖国への思いを抱く郭沫若は日本で特高警察の監視を受けている。二月五日の自分の講演が禁止され、このような印象は一層深まったことであろう。こういった状況下で、郁達夫に郭沫若を帰国

⁹ 『郁達夫書信集』（杭州、浙江文芸出版社、1987年）167頁

¹⁰ 武継平「一九三六年郁達夫訪日史実新考」、『中国文化研究』2010年第1期、李麗君「郁達夫一九三六年訪日新史料——近年日本外務省解密檔案考」、『現代中文学刊』2011年第5期

させようという考えが生まれたことは当然のことであった。¹¹ 帰国後、郁達夫はすぐさま郭沫若の帰国のために「奔走」している。最初の「奔走」の結果はこうであった。

一九三七年三月のある日の午前、勤務終了に近づいた頃、達夫先生は文書封筒を手に持ち私の机の前にやってきて、最近文章の執筆と付き合いに甚だ忙しいので、私に急ぎの書簡を代筆してほしいとおっしゃった。その文書を開けてみたところ、機密文書であった。一枚は陳儀が当時の行政院政務処長蔣廷黻に宛てた書簡であり、郭沫若先生の帰国定住を許可してもよいか蒋介石に指示を請うように彼に求めたものであった。もう一枚はその即座の返信であり、その中には、「蒋介石の許可を得たが、『逸脱行動』は認められず、福州に居住し陳儀に監視させる」との文言があった。達夫先生は、烏山路のかつて蔣光鼐が福建省主席の任にあった時に住んでいた私邸（すでに国有財産とされている）を郭の住居と定め、保護と監視の任務を請け負うことを蔣廷黻宛てに通知する書信を、私に代筆させた。また書信中にはその家屋が洋式の二階建て一棟の建物で烏山の麓に独立して建っているとの説明があった。書信の具体的内容は陳儀の「手諭」から抜き出したものだった。書き終わったあとと審査のため達夫先生に提出したので、そのあとの状況は知るすべがない。しかしその後長らく郭老が帰国したという情報を聞かなかった。私も尋ねることははばかれた——この事を知るものは多くない。¹²

¹¹ 廖久明「郁達夫一九三六年末の日本行と郭沫若帰国の関係について」『中国現代文学研究叢刊』2010年第2期

¹² 蔡聖焜「福州における郁達夫先生を憶つ」『回憶郁達夫』、長沙、

郁達夫は一九三六年二月六日に日本で郭沫若に帰国を勧めたと
き、郭沫若は逆に郁達夫に「俗史のような事柄にとらわれるよりも、
いついかなる場合にも自らの作家としての生命力を豊かにするべき
だ」と諭している。¹³ いま、何廉が陳儀に送った手紙の内容は「蔣
介石の許可を得たが、『逸脱行動』は認められず、福州に居住し陳儀
に監視させる」というものであった。郁達夫は、このような条件では
郭沫若は帰国しないことがわかつていた。そのため、その後の二通の
手紙の中では「一、二の事を簡単に伝えるしかなく、事柄が熟してい
ないために、あからさまに伝えることができなかった」。

このような状況下で、次のように郁達夫は再び「奔走」するほかな
かった。

一九三七年四月二八日、郁達夫は福建の馬尾を發ち、航空学
校の卒業式に参加するために杭州へ向かった。杭州に着いたのは
四月三〇日である。『回程日記』の記載によれば、四月三〇日
から五月四日までの五日の間に、郁達夫は軍事委員会委員長侍
從室第一処主任兼侍衛長錢大鈞、国民党宣伝部部長邵力子、浙
江省教育庁長許紹棣、国民政府航空委員会主任委員（委員長は
蒋介石が兼任、周至柔ら党と政府の要人と宴席を共にしている。
そのうち錢大鈞と宴席を共にする回数が最も多かった。五月一

湖南文艺出版社、1986年、369頁。説明の必要があるのは、
陳義が手紙を書いた相手は何廉であるべきで、蔣廷黻ではないと
いうこと。

¹³ 郭沫若「達夫の来訪」『抱箭集』、上海、海燕書店、1949年、
296頁

日、「昼に慕尹主任夫婦と樓外樓にて小飲、たまたま力子先生が上海から来られたところに出会い、招いて同席する。午後三時に解散」。五月二日、「夜、紹楙が招待し、慕尹主任夫婦と三義樓で食事。食事後、皆で東南日報館に行き話劇『狄四娘』を観る。十時すぎに解散」。五月三日、「夕刻、錢主任と約束し王潤興へ行き夕食。同席者はみな航空の健将で、九時頃まで飲む。大いに酔う」。¹⁴

この度の「奔走」を経て、ついに五月一日朝、「手紙を出すように言われた。委員長はあなたを頼りにしているので、速やかに帰国されたしとのことである」というような内容の「南京からの打電」に接したため、郁達夫は「喜びにたえ」なかったのである。

しかし不思議なことは、軍事委員会委員長侍從室第一処主任兼侍衛長の錢大鈞は一九三七年三月に休暇が明けて以降、ずっと蒋介石の身辺に付き従っており¹⁵、もし彼が郭沫若の帰国の件を進言しようとしていたなら、結果が出るのにこんなに長い時間はかからないはずだ。以下の回想文を見ると、五月一日朝の「南京からの打電」はやはり何廉と関係があることがわかる。

五月末の前後、委員長が南京に戻り行政院長に復職したとき、私は委員長に会見し報告をおこなった。ほかの些事を除けば、おもに述べたのは私が知り得た資源委員会に関する状況であつ

¹⁴ 廖久明「郭沫若帰国と何廉の果たした役割について」(『新文学史料』2015年第3期)

¹⁵ 陳布雷『陳布雷回憶錄』(台南、王家出版社有限公司、1989年)167頁。西安事変後のしばらくの間、錢大鈞は「胸部の銃傷のため在宅療養していた」(『陳布雷回憶錄』164頁)。

た……

委員長は牯嶺に行く前、南京には数日滞在しただけであった。夏の最も暑い数カ月、委員長と政府、特に行政院は、牯嶺という避暑地に行き事務をおこなった。まだ南京にいる時に、委員長は私を呼び出し、南京から離れることができ次第、すぐに牯嶺へ行って、委員長およびほかの者と牯嶺国事会議の準備をするように命じた。翁文灝と私はかつてこの会議の参加者名簿を起草したことがあった。¹⁶

何廉の回想文と合わせ、『事略稿本』中の関連する記載を見てみよう。

五月一日、「二時半、上海から南京に飛ぶ。午後、王寵惠部長らと談話する」。五月三日、「正午、軍艦に乗船、南京より九江に渡航」。五月二六日、「金井より牯嶺に向かう」。¹⁷

ここから、蒋介石が五月一日に南京に戻ったあと、何廉が面会に行き状況を報告したことがわかる。蒋介石が「牯嶺国事会議」を話題にしたとき、何廉は再び郭沫若の件に触れ、蒋介石の許可を得たのである。「南京からの打電」の日時が五月一日朝であったことから推測できるのは、何廉が郭沫若帰国の件を再度蒋介石に進言した日時は蒋介石が南京に戻った翌日、すなわち五月一七日であることだ。

三、一九三七年六月上、中旬…逮捕令取り消し問題により郭沫若は最終的に廬山談話会参加者名簿に入れられなかった。

¹⁶ 朱佑慈、楊大寧、胡隆昶訳『何廉回憶錄』125～126頁

¹⁷ 王正華編輯『蔣中正總統檔案…事略稿本』第40巻 325～351頁

郁達夫は五月一日に郭沫若に手紙を書いた翌日、さらに郭の七番目の妹の夫である胡灼三に一通の手紙を出している。

お手紙拝読しました。少し余裕ができたので書いています。沫若の事、すでに中央と話がつき、逮捕令を取り消し、即日中国に渡航し職務に就くよう命令が下っています。私は昨日手紙を出し、中央に資金を多く送金するように依頼しました。中央は彼が疑念を抱くことを恐れ、私に彼あての手紙を書くよう求めたので、私は速達の手紙を二通出しました。この手紙を見た後、彼が安心して戻ってこれるように、あなたも彼に速達を一通出していただけないでしょうか。郁某は決して友を売るような人間ではない、戻ってきててもよいのだ、とだけ言ってください。

返信無用、時節柄、ご自愛ください。 18

六月二日、郭沫若は胡灼三に宛てた手紙でこのように書いています。

先月二十三日の手紙と最近妹から来た手紙、どちらも受け取りました。郁君も福州から手紙をよこしました（五月十八日）。ただ言及された件については、その後今に至るまで消息がなく、そのため長くお返事をしませんでした。どうぞお許しください。

.....

出処進退については私自身に考えがあり、どうかあまりお気になさらないでください。将来もし帰国する時には、もちろんお手紙でお知らせします。良き出会いとなりますように。 19

18 『郁達夫書信集』 168頁

19 黄淳浩編『郭沫若書信集』上冊（北京、中国社会科学出版社、1

この手紙から知れることは、胡灼三が郁達夫の手紙を受け取ったのち、五月三日に郭沫若に手紙を一通出したが、郭沫若帰国の件は「その後今に至るまで消息がなく、よって「長く返事をしなかった」、そこで郭沫若の七番目の妹の郭葆貞がまた手紙を書いたということである。このような状況で、郭沫若は返事を書くしかなかった。わびる気持ちを表すと同時に、彼らに「出処進退については私自身に考えがあり、どうかあまりお気になさらないでください。将来もし帰国する時には、もちろんお手紙でお知らせします。良き出会いとなりますように」と告げたのである。この手紙から、郁達夫が何廉に返信を打電したにもかかわらず、結果は逆に「その後今に至るまで消息がなく」ったことがわかる。

これはそもそもどういう原因だったのか。次の二つの文を見れば、その真相がはつきりする。

今年五月（按：旧暦であろう）、廬山にて、慕尹、公洽、淬廉ら諸氏とあなたのことを話した。みなあなたを呼び戻したいのだ。しかし逮捕令の取り消しに関しては、躊躇せざるを得なかった。なぜならもし早めに取り消せば、おそらくあなたは日本を離れることができないだろうから。 20

六月はじめ、私は教育部政務次長周炳琳とともに飛行機に乗り南京から牯嶺に飛んだ。政府の仕事に参加する前は、周は国立北京大学の教授であった。彼は国民党員であり、その上たい

992年）434頁

20 郭沫若『爆撃の中に去来す』（上海、抗战出版部、1937年）25頁

へん進歩的な考えを持った人物である。続いて、陳立夫、陳布雷、潘公展ら多くの人がやつて来た。私たちは一連の会議を開き、廬山談話会に招くべき参加者の最終的なリストと会議の日程などを策定した。²¹

まず、蒋介石が廬山で正式に廬山談話会の開催決定に署名した日時が六月一九日であることと考え合わせ、張群、何廉らが廬山で郭沫若の件を相談した日時は六月上、中旬であり、最初の引用文の「五月」ではない（もし旧暦五月とするなら正しい）ことが断定できる。

「六月一九日、蒋介石は廬山で正式に廬山談話会の開催決定に署名し、国民党中央政治委員会秘書長張群が談話会秘書長に就任し、具体的準備作業の責任者となった。中央政治委員会副秘書長の曾仲鳴が談話会秘書主任に就任し、軍事委員会辦公厅秘書処長の羅君強と侍從室二処四組組長の陳方の二人が談話会秘書に就任した。談話会の出席者には、会議の名義で通知を出すのではなく、中央政治委員会秘書長張群の名義で招待状を出し、別に汪精衛と蒋介石の連名で「若叙候教茶話会にて教えを請う」と記した招待状を添えた。なぜなら談話会は「中央政治委員会」の發議で開催するもので、ゆえに中央政治委員会主席の汪精衛が談話会を主催し、蒋介石の名は汪精衛の後になるのである。」²²

次に、上の二つの引用文によれば、六月上、中旬に二連の「廬山談話会に招くべき参加者の最終的な名簿と会議の日程などを策定する」会議を開いた時、張群と錢大鈞（慕尹）、陳儀（公治）、何廉（淬廉）らが郭沫若のことを話題にし、みな郭沫若を「呼び戻したい」と考え

ていたが、「逮捕令の取り消しに関しては、躊躇せざるを得なかった。なぜならもし早めに取り消せば、おそらくあなたは日本を離れることができないだろうから」。

まさにこの理由のため、六月二三日に全国二二二名の国民党中央党部と国民政府各院部主管人員、在野各党派各団体の指導者、高等教育と学術界の著名人、報道出版界の人士、工商財界の人士に向けて廬山談話会参加招待状を送った時²³、名簿に郭沫若の名がなかった。したがって、郭沫若帰国の件は再びうやむやになってしまったのである。

上述をまとめれば、郭沫若帰国問題と廬山談話会準備工作の関係はこうである。

一九三六年二月三〇日、蒋介石は廬山談話会の開催を考慮し始める。

一九三七年二月の中、下旬、郷里から南京に来て国民党中央執行委員会の會議に参加した行政院院長蒋介石は、行政院秘書長翁文灝、政務処長何廉に廬山談話会参加者名簿を起草するよう指示した。

何廉は一九三三年に東京で郭沫若に会ったことがあるため、郭沫若が蒋介石の言う「真の学問と愛国の情熱を持った知識人」に属することを知っていた。そこで郭沫若を参加者名簿に入れることを提案し、翁文灝は反対せず、蒋介石はそれを見た後「おお、これはよい。この人物について私は十分わかっている」と言った。

一九三七年五月一七日、何廉は蒋介石が「牯嶺国事會議」を話題にした時に再び郭沫若の件を提起し、許可を得た。何廉は翌日の朝、「委員長が頼りにしているので、速やかに帰国されたし」と陳儀に打電した。陳儀はその電報を郁達夫に転送すると、郁達夫は「喜びにたえず、

²¹ 朱佑慈、楊大寧、胡隆昶訳『何廉回憶録』125～126頁

²² 熊煒「廬山談話会始末」『文史大観』1996年第1輯（廬山世界自然文化遺産申請特別号）

²³ 余子道「七七事変後の廬山談話会」『档案与史学』1995年第3期

さつそく航空便一通、普通便一通を出した。一方で南京に打電し、まづ指名手配を取り消し、それから一日も早く出発できるように渡日の旅費を多めに送金してくれるようお願いした」。

本論文は、郭沫若が、一九三七年七月、日本における亡命生活を切り上げて秘密裏に帰国した事件をめぐる国民党側の動きを扱う。

それを象徴する出来事に、蒋介石が計画した「牯嶺国事会議」（37年7月開催。避暑地廬山の牯嶺廬山で各界の人士を招いて国事を論じた談話会。本論文では「廬山談話会」と訳されている）がある。本論

編集子

文は、この会議についての考察の一部で、最初郭沫若も招かれる予定だったが、結局、それは実現しなかった。それはなぜか、という問題を論じたものである。

特に、盧溝橋事変以後、監視は急速に厳しさをました。日本政府は郭沫若のような影響力のある人物が、帰国して抗日運動に参加することを恐れたのである。

論文筆者の廖久明氏は乐山師範学院教授で、四川省郭沫若研究センター主任。郭沫若帰国問題における国民党の関与は、同教授が近年追求しているテーマで、本論文は当会報のための書き下ろしである。

成仿吾の欧州行（二）

成仿吾の革命文学論・欧州へ向う直前の活動・（上）

成家 徹郎

本稿は、成仿吾の欧州行について考察するのが目的である。ただ欧州へ行く直前の成仿吾の文学活動をちよつと見ておきたい。といっても筆者は文学に無知であるので、以前から気になっていた革命文学論についてだけ簡単に考察したい。ただ気をつけておきたいことがある。成仿吾はおそくとも一九二八年四月には、欧州へ行く決心がついていたはずである。しかし創造社同人はこのことを誰も知らない。そして彼らは革命文学や創造社の今後について熱心に論じていた。その中心人物のひとりが成仿吾である。周囲の人は、成仿吾の欧州行をいつ知ったか？ おそらく彼が日本でソ連行きの船に乗ったあとのことであろう。だから周囲から見ると、突然、創造社および革命文学を捨てて欧州へ行った、と思われたはずだ。

この時期（一九二七年前後）の「革命」は、複雑な状況下にあった。特に成仿吾と魯迅の論争はこの時期の「革命」を考えるうえで大いに意味がある。革命の意味を正しく認識しないと、成仿吾と論戦を演じた魯迅文の中の「革命」の意味を読みあやまることになるだろう。革命という語は中国でずっと昔から存在した。「革命」の意味について赤塚忠等編『漢和辞典』はこう説明している。

天命を改める。天命を受けた者が新たに王朝を開くこと。『周易』
「革」

本稿は中国の伝統的ことばの革命を特に区別したいとき（革命）で表記する。「革命」はすなわち、いまある支配権力を倒して、下にあったものが支配権力を握ることである。転覆と言ってもほぼ同じ意味である。中国の歴史では、「革命」はしばしば起こった。「殷周革命」は有名である。また辛亥革命も「革命」そのものである。『蒋介石秘録3《中華民国の誕生》』（サンケイ新聞社一九七五）には、この革命の進展状況がかなり具体的に描かれている。満州族の清朝を倒して漢族が支配する国家を成立させる。紆余曲折はあったが一九一七年に広東政府が成立し孫文を中心として全中国の統一を目指す。一九二五年孫文死去後は、蒋介石が国民党軍をひきいて国民革命を進める。以後、蒋介石の国民革命はおおむね順調に進んだと言える。

味岡徹は『中国国民党訓政下の政治改革』（4頁）でこう述べている。（汲古書院二〇〇八）

孫文は一九二五年三月、建国大綱、国民党一大大会宣言などの実現を求める「遺囑」を残して病没したが、蒋介石ら後継者は二八年六月に北京政府を倒してほぼ全中国を統一し、孫文の革命プログラム実現の条件を作り出した。国民党は全国を統一すると、建国大綱に従って「軍政」を終了し、「訓政」を開始した。

「革命」は意味拡大して、改革とか革新、変革という意味にも使われた。「文学革命」の革命もこの意味であろう。

一方、近代になって共產主義思想からくるこの革命という語が日本ばかりでなく中国でも使われてきた。ここで日本でも中国でも混乱が生じた。独語英語の Revolution に対する訳語として、中国で古くからある語「革命」がそのまま当てられた。（いま私は Revolution に革命という訳語を最初に与えた人が日本人か中国人かについて知らない）本稿は Revolution の訳語を、特に区別したいとき革命を使う。

中国で革命という語が出ていらい、「革命」と革命はしばしば混同されて使われた。辛亥革命とか蒋介石の国民革命はいうまでもなく「革命」の意味であり、また革新、変革の意味が込められている。蒋介石の国民革命に中国共産党も郭沫若も賛同して参加した。だからしばしば目にする「蒋介石の反革命」という言い方は、注意を要する。蒋介石はずっと、国民革命を目指して進んできた。

中国で、革命は、改革とか革新、変革という意味とほとんど同義であつたから、たいていいつの時代でも新しい世代から「革命」は歓迎されることば、あるいは主張であつた。

丸山昇はこれに関連してこう述べた。『魯迅と革命文学』紀伊国屋新書

魯迅の「『語絲』差押え雑感」にこういうくだりがある。

以前は出版物の表紙には、手にシヨベルやツルハシを握つた労働者が画かれ、文中に「革命!」「革命!」「打倒!」「打倒!」とあるものなら、順風満帆、よしということになった。

魯迅のこの記述について丸山昇は「注意が必要である」としてこう述べる。

これが具体的にどのような出版物を指していたか、今日の日本では明らかにし難いが、このような言葉から、日本の状況にならされたわれわれはただちに、中国共産党あるいはマルクス主義の立場に立つ出版物を想像しがちである。しかし国共合作の上に立つ国民革命期の中国では、あるいはさらに広く言つて、辛亥革命を体験し、孫文の「革命なおいまだ成らず」の「遺囑」がその後も長く全国民的スローガンとなつたことにその性格の一端が示されている中国近代史の中では、「革命!」「打倒!」といった言葉は、共産主義者の専売特許ではなかつた。

ところで、日本では伝統思想に「革命」という観念は存在しなかつ

た。源頼朝が鎌倉幕府を成立させたが、革命ではない。徳川家康の江戸幕府も同様である。明治政府に至つては「王政復古」(あるいは「王制復古」)である。日本の歴史で革命は一度も起こらなかった。だから日本では革命は禁句であつた。日本社会主義同盟や中国共産党は、思想を抱いているというだけで、弾圧を受けた。明治政府の成立から昭和の敗戦まで、権力者による思想弾圧の歴史という一面を持つている。成仿吾とほぼ同じ時期にプロレタリア文学を書いた小林多喜二と、同様の主張を展開した成仿吾、二人のその後の人生は対照的であつた。(小林多喜二は一九三三年に逮捕され拷問によつて死亡。)

成仿吾の革命文学論を、まず中井政喜の『一九二〇年代中国文芸批評論』によつて見ていこう。

中井氏は、成仿吾の文学論の量から質への轉換は「文学革命から革命文学へ」(『創造月刊』第一卷九期一九二八年二月、一九二七年十一月脱稿。於修善寺)を見なければならぬ、と言う。そして、文学革命の経過について紹介したあと、こう述べる。(166頁)

さらに、成仿吾は創造社が口語体の創出完成へと努力したこと、それが必ずしもうまくいかなかったことを述べた後、北京の一部の特殊な現象を指摘する。(第四章)

文学革命の現段階に関する考察には、北京の一部の特殊な現象があるので、少し触れなければならない。それは「語絲」を中心とする周作人一派の芸ことである。彼らの標語は「趣味」である。私(成仿吾)は以前、彼らの誇るところは「閑暇、閑暇、第二の閑暇」である、と言つたことがある。彼らは有閑の資産階級、或いは太鼓の中に眠る小資産階級を代表している。彼らは時代の上を超越しており、すでに多年このように生活してきた。もしも北京の真つ黒に立ちこめる毒気が十萬両の無煙火薬で吹き飛ばされないならば、彼らは永遠にそのように過ごすのかも知れない。

これに関して中井氏は言う。

成仿吾は一九二七年一月の「完成我們的文学革命」『洪水』第三卷第二十五期、一九二七年一月)において、「閑暇、閑暇、第三の閑暇」として周作人、劉半農そして陳西滢をも揶揄しつつ否定した。成仿吾はその主たる理由として、「趣味」とは遊びであり、そこには細々した現象に没入して全体的な観察ができないがゆえの、非芸術的態度がある、と指摘した。ここでは、成仿吾は『語絲』を中心とする「周作人一派」を、「有閑の資産階級、或いは太鼓の中に眠る小資産階級を代表」するものとして、社会科学の意義づけを装いながら(具体的分析をすることなく)、全否定する。言い換えれば、右のような「語絲」派に対する否定的評価も、成仿吾の従来の漸進してきた見解に基本的に依拠しながら、マルクス主義文芸理論という補強・装飾を一層強化しつつ再提出しているもの、と言える。

成仿吾の「閑暇、閑暇、第三の閑暇」に対して、魯迅は『三閑集』序言でこう書いた。(竹内好訳『三閑集序言』)

ところが(広東から)上海へ来たとともに、文豪たちのペンの包圍攻撃にぶつかった。(中略)一つだけ創造社に感謝したいことがある。かれらに「追いつめ」られたお陰で、私はいくつか科学的文芸論をよみ、これまで文学史家たちがどんなに弁舌をふるおうとも解けなかった疑問が解けたことである。しかも、この機にブレハーノフの『芸術論』を翻訳して、進化論だけを信じていた自分―および自分を介しての他人―の偏見から脱却することができた。しかしながら、私が『中国小説史略』を編むに当たって集めた材料を、青年の検索の労を省く目的で『小説旧聞鈔』として公開しようとしたとき、成仿吾がプロレタリア階級の名においてこれを「閑」事業と見なし、しかも「閑、閑、閑」と三つも並べたてたことについては、いまなお完全に忘れるわけにはいかない。思うにプロレタリア階級は、三百代言じやあるまいし、

口でまるめて人を罪におとす手口など知るわけがない。編集をおわって、題名を『三閑集』としたのは、仿吾への当てこすりである。

一九三三年四月二十四日の夜、編者しるす。

筆者(成家)思うに、魯迅が『小説旧聞鈔』を書いて非難されるなら、郭沫若が市川市で甲骨文や青銅器銘文の研究に没頭していたことを成仿吾は非難しなくてはならない。

中井氏は成仿吾の「從文学革命到革命文学」第六章を紹介する。

資本主義はすでに最後の日にいたり、世界は二つの陣營を形成した。一方は資本主義の余毒ファシストの孤城であり、一方は全世界の労働大衆の連合戦線である。それぞれの細胞が戦闘の目的のために組織され、文芸の従事者は一つの分野を担当しなければならない。(中略)

誰も中間に立つことはゆるされない。こちらへ来るか、或いはあちらへ行くかである。追隨するのみであってはならない。さらに再び落伍してはなるまい。この社会変革の歴史的過程に自覺的に参加するのだ。弁証法的唯物論を努力して獲得し、唯物的弁証法の方法を努力して把握せよ。それは君に正しい指導を与え、必勝の戦術を示すであろう。

自己の小資産階級の性質を克服し、アウフヘーベンされるであろう階級に君の背を向け、歩みだすのだ。汚れた中で働く労働大衆に向って。

中井氏は「從文学革命到革命文学」(一九二八年二月発表)を総括してこう評価した。

(1) 成仿吾が一九二六年末頃からマルクス主義文芸理論に接触・受容しはじめ、漸進的に転換し接ぎ木的に進展させてきた文芸理論の、量から質への転換点を示すものであった(こうした質的転換へと促して

きた重要な推進力が、国民革命の高揚とその挫折であつた。

〈成家注〉

『国民革命の高揚とその挫折』

『挫折』は、一九二七年四月十一日から始まる蒋介石による共産党に対する弾圧を指しているに違いない。しかし蒋介石の国民革命は、けつして挫折はしなかった。国民革命の政策の上で、方針に変化が起こつただけである。つまり共産党も加えて行かうという方針が、孫文が死去したのを機に、共産党を締め出し弾圧する方針に変えたのである。国民革命は依然として継続して進んだ。

中井氏はさらに続けてこう述べる。(172頁「さいごに」)

その後の革命文学論争における成仿吾の文芸理論がどのように展開したのかについて、若干の点に触れておきたい。

成仿吾は同じく「全部的批判之必要」で次のように指摘する。

私たちの批判はこうした様々の過程を完了してこそ、全体的批判でありうる。しかしこの文芸意識形態の批判のほか、文芸の特殊性―表現手段と表現様式等―にも注意しなければならない。これらも当然社会的関係であり、そのため物質的生産力に規定される。しかし一定の範囲内においてそれらはそれ自身の發展法則をもっているのである。

さらに、成仿吾は次のように言う。

革命運動の現段階において、社会の内在的矛盾がすでに先鋭化しているときに、あらゆる抗争は階級意識から出発せざるを得ないのである。(畢竟是「醉眼陶然」罷了)

また他面から言えば、成仿吾の場合、階級意識の獲得の強調によつて、文学自身の固有の發展法則の側面(表現手段と表現様式等の)が、

革命文学への「方向転換」という表象の中に解消、埋没しがちであつた。言い換えると、社会發展の現段階の状況に深く規定される、あるべき革命文学にいたる過渡的過程、方向転換の過程の中において、この側面は本来持つべき重要な意義をもつことができなかつた。

成仿吾の革命文学

中井氏は言う。

成仿吾の言う「革命文学」の内容とは、ここでは「眞実、正義、仁愛等」の積極的人間性を推進助長し、「虚偽、不正義、嫌惡等」の消極的人間性を排除抑圧することを指す。

成仿吾は「革命文学与他的永遠性」(一九二六年六月發表)において次のように言う。

革命文学は、革命という二文字がある故に、革命という現象を題材とする必要があるのではなく、大切なのは伝える感情が革命的であるかどうかである。(中略)たとえその材料が革命から採つていないとしても、それが細々とした小事であるとしても、その伝える感情が革命的であり、人類の死寂の心に革命に対する信仰と熱情を吹き込むことができさえすれば、この作品は革命的と言わないわけにはいかない。(中井書188頁注36)

成仿吾は「完成我們的文学革命」(一九二七年一月發表)で次のように言う。

私たちが少し反省しさえすれば、それらの趣味家の態度に不満を感じるはずである。第一に、彼らの態度は遊びであり、不誠実である。189頁(39)

成仿吾はまた「打倒低級的趣味」(一九二七年二月發表)で次のように言う。

現在の資産階級の教養は虚偽的で不完全である。その趣味は全体と

して低級なものである。その趣味の様々の特徴の中で最も憎悪すべきは奢侈と独占である。

これに対し、魯迅は、「『硬訳』と『文学的階級性』」（一九三〇年三月発表、『二心集』）で次のように指摘する。

中国の作者の中で、今実際のところ鋤や斧の柄から手を離れたばかりという人はいない。大多数は学校に入つたことのある知識人であり、或る人たちはとくに有名な文人であつて、よもや自己の小ブルジョア意識を克服した後、以前の文学的技量さえもそれとともに消滅してしまつたのではあるまい。それはありえないことだ。（中略）中国の、スローガンがあつて、それにともなう実証がないのは、私が思うに、その病根は、決して「文芸を階級闘争の武器にする」ことにあるのではなく、「無産階級文学」の旗のもとに、急にとんぼ返りをした少なからぬ者が集まつたことにある。試みに去年の新本の広告を見てみると、革命文学でないものはほとんど一冊もない。しかし批評家はまた弁護を「清算」とみなすだけであつて、すなわち「階級闘争」の援護の下に文学には坐つていただいたのであり、そこで文学自身は力を注ぐ必要もなく、そのため文学と闘争の二方面で関係が欠けてしまうことになつた。（傍線は成家が付けた）

中井氏は言う。

これは一九二八年以降のことを指して言うものであるが、自らの文学主張を階級闘争の援護のもとに坐らせたという点で、一九二七年始め頃の成仿吾の姿勢にも妥当する批判であつた。

創造社同人と魯迅の合作の計画が成仿吾の一存で流産した

この計画の出現から、流産までの経緯は、各当事者間の記述に矛盾が見られる。まず郭沫若、次に小谷一郎の解説『創造社研究』二年表（表）など、その後の中井政喜の説を紹介する。

郭沫若「東海をまたいで」

『日本亡命記』（小峰王親訳）法政大学出版局

私（郭沫若）は創造社を愛した。特に創造社が青年のなかで生じた影響を愛した。それで私は一面社を強化するとともに、あわせて援護にもなる仕事にたずさわりたいと考えた。それにはどのように強化をはかつたらよいであろう？ 私は人事の上で、まず李一氓と陽翰笙の参加をもとめた。同時にまた鄭伯奇と蔣光慈との活動を通じて、魯迅の合同を請うたことがあつた。魯迅もそのころ、広東から上海に帰つてきていた。そして私の合同の要請に対して、彼は快よく承諾してくれたのだつた。

さて援護の面ではどんなふうなことをしたかという、私の当時予定した方法は、こういうものだった。第一に『創造週報』を復活し、もっぱら青年を対象にするのである。その次は『創造月刊』を充実する。しかも純文芸という範囲から拡大して総合的なものにする。さらにその次は社会科学と自然科学の叢書を発行する。

それで私はさつそく第一歩から着手した。それについて、かつて新聞に、「創造週報復刊」の広告をだしたことがあつた。この広告には魯迅の名前を筆頭に、私は麥克昂の変名で第二番目に、次が成仿吾、鄭伯奇、蔣光慈などの順にのつていた。

ところがこの計画は思わぬことから、意外な壁につきあたつてしまつた。私がこの計画を決めるころ、仿吾は日本にいた。私はてっきり彼がこの計画に同意するだろうと思ひこんでいて、しかもなるべく早く発足させたいという気持ちから、事前に彼の賛同をえていなかったのである。しかるに仿吾は日本で、別のグループとあらたな計画をたてていたのだつた。それは創造社を明い思想闘争の基盤にしようとしていたことで、極力弁証唯物論と歴史唯物論の推進をはかることにつとめていた。このグループは、李初梨、彭康、朱鏡我、馮乃超、李鉄

声らである。彼らは少壮派であつて、非常に血気さかんだった。彼らの革命意識は異常なまでもえあがつていた。そしてこの計画を推進するために、大半が大学の卒業を目的のまゝにひかえながらも、その卒業試験を放棄してまで、ぞくぞくと仿吾よりさきに上海に帰ってきたのだつた。

二つの計画がうまく落ち合えないことで、日本の火が上海の水をあびたかっこうになり、短い期間であつたが、最初のころはお互が対峙する場面を呈した。私は仿吾の帰国を待つて、よく話しあつてからあらためて腹を決めようと主張した。そこで電報で仿吾を急がせた。そのうち仿吾は日本から帰ってきたが、彼はあくまでも『創造週報』の復活には反対で、週報の使命はすでに完了したというのである。そして帰国グループの提案を支持して戦闘的な月刊ものをだそうという。名前は抗流（後にこの名称は使わず、文化批判とあらためた）ということにした。しかも、魯迅との合同の件については、一様にはなはだそつけないものだった。こんなぐあいだったから、とどのつまりは私自身が自分の態度を決定しなければならないことになった。私としては十二分にわかつていた。それはもしも私が自分の主張を固持しようものなら、当時の雰囲気からして、創造社は分裂をきたすであらう。が、これは私がもつとも望まないことであつた。それに私は間もなく国をでる体で、そうなれば仿吾が将来の創造社に対して、いつその責任を負わねばならなくなるであらうから、彼がやりたがつている計画通りに実施すれば、気持の上からも余計はりきるだらうし、もつと大きな効果をおさめられるだらう。いわんや新しい計画は、多少危険性があるかもしれないが、それがかえつてより合理的な方法であつたとなるかも知れない。いずれにせよ実験を經ていないことだけに、私がただむやみに反対することもならず、けつきよくは私の方から一歩ひきさがらざるをえなかつた。

このような問題の発生と進展は、ほぼ十一月の一カ月内でのことか

らで、私が譲歩したのは、『ファウスト』の整理に専念すると発表した時、すなわち十一月の下旬だった。私の第一部を訳した後記の中に、この期日が保存されている。そこに書いておいたのは、「民国十六年十一月改訳完成」で、文中にはつきりところふれておいた。

「着手以来わずか十日たらずで完成したものである」と。

郭氏のこの記述には、このあとで紹介する記述とくらべると、時間の前後関係において明らかな記憶違いを認めることができる。郭沫若『亡命十年』（「東海を越えて」を含む。筑摩書房）を訳した岡崎俊夫は、「訳者あとがき」でこう書いている。

「東海を越えて」「私は中国人だ」は、日本から帰つて、ずっと後に中国で書かれたためか、明らかに著者の記憶ちがいとおぼしい個所が少なくない。

伊藤虎丸の記述

（伊藤虎丸編『創造社研究』『創造社小史』37頁）

四・一二以後の新しいそしてよりきびしい状況の中で、いかにして進歩的文学者たちの再結集をはかるかをめぐつて、その時にあり得た幾つかの路線の対立をもふくめて、その方策が模索された時期だったといえよう。

そして、この時期の終り頃に、魯迅との合作（というより、魯迅や太陽社系の人たちをも含めた左翼系作家の大同団結）という方向が放棄され、日本留学中の新人たちを呼び返して『文化批判』を創刊するという路線を、創造社は（成仿吾の主導で）選択したかに見える。

小谷一郎の記述

（小谷一郎編『創造社年表』『創造社研究』136頁）

まず『創造社年表』に次の記述がある。

「一九二七年十二月三日

『時事新報』に『創造週報』復活預告”

これについての小谷氏の注〔注46〕は以下のとおり。

『創造週報』の復活、魯迅との合作について鄭伯奇は「創造社後期の革命文学運動」の中で、こう書いている。

我々は郭沫若同志の同意と支持を得た。そこで一緒に魯迅先生をたずね、連合する気持ちを語った。魯迅先生は即座に欣然として同意した。そして、別に新たに刊行物を出すことはない、『創造週報』を復刊させて、共同活動の場にすればよいと主張した。魯迅は、積極的に参加するよ、と言ったので我々はとても喜んだ。郭沫若も、非常に歓迎する、と喜んだ。

この記述は鄭伯奇の「略談創造社の文学活動」や郭沫若の回想とは異なっている。

小谷氏はさらに「創造社年表」の〔補注8〕「第三期創造社同人の帰国と魯迅との合作の流産をめぐって」（156頁）でこう書いている。

ところで、「国民革命」挫折後の状況の中で、創造社が第二期といわれる時期から第三期へと移行していく過程、なかでも、創造社と魯迅との合作をめぐる経緯は、それが「革命文学論戦」からみれば、いわばその前史にあたる部分であり、直接、間接にこの論戦とかかわっているのではないかと考えられる。また、この過程、経緯は、第二期創造社と第三期創造社のつながりを示すものであり、創造社の文学活動そのものや、創造社の「左旋回」といわれる問題を考えていく上でもひとつ見逃すことのできないことであるように思われる。

さて、創造社と魯迅との間に合作の話が持ち上がるのは、魯迅が廣州から上海に来た、一九二七年十月ごろのことである。この話は、はじめ、鄭伯奇、蒋光慈、段可情等の間で計画され、その月の下旬、香港から上海に入った郭沫若の同意を得て実行に移された。鄭伯奇等が魯迅を訪ねるのは、十一月九日のことであり、魯迅はこの時、彼らの

申し入れを心よく承知した。鄭伯奇はこの間の事情を「創造社後期の革命文学運動」の中で次のように記している。

我々はこう思った。進歩的作家がこんなにたくさん上海に集まっているから、みんなが連合して一つの刊行物を出し、新文学運動を提唱したなら、そうとう大きな影響を起こすに違いない。政治革命はしばし挫折を受けたが、まず文芸戦線上から戦闘態勢を立て直し、将来の革命高潮を迎えるための条件にする。これはとても良いことではないか？ 蒋光慈と段可情も同じ考えであった。我々は郭沫若同志の同意と支持を得て、一緒に魯迅先生を訪問し、連合したい意思を語った。魯迅先生は即座に欣然と同意した。そして彼は、別に新たに刊行物を出すことはない、『創造週報』を復刊させて、共同活動の場にすればよいと主張した。魯迅は、積極的に参加するよ、と言ったので我々はとても喜んだ。郭沫若も、非常に歓迎する、と喜んだ。

ところで、この鄭伯奇の回想の中で注目しなければならないことは、魯迅自身が『創造週報』の復活を提起していることである。すでに（小谷氏注46・136頁）でのべたように、この記述は鄭伯奇の他の回想や、郭沫若の「東海を越えて」などの記述と大きく異なる。いずれかの記述が事実に近いものかは断定できないが、『創造週報』の復活というその発想からいって魯迅の方が提起した可能性も十分ありうるように思われる。

とまれ、こうした事実関係は別として、魯迅と創造社との合作の話は『創造週報』を復活させるという方向で進展していった。沈鵬年の「魯迅和創造社交往的兩点史実」の指摘に従えば、事前に魯迅の了解を得た（沈鵬年は、これを十一月十九日のこととする）といわれる『創造週報』復活預告は、十二月三日の『時事新報』紙上に掲載された。そして同じ予告は、一九二八年一月一日発行の『創造月刊』第一卷第八期にも掲載された。以下は、私が、上海の魯迅記念館で見た、『創造月刊』誌上の『創造週報』復活預告の全文である。

小谷一郎が載せる全文はここでは省略して、いま必要な部分だけ記す。

「編輯委員」は、成仿吾、鄭伯奇、王独清、段可情の四人である。「特約撰述員」には三十名の名前が並んでいる。その筆頭が魯迅である。他に郭沫若、麦克斯・名で載っている。

この後、小谷氏はこう書いている。

このようにして並んでいる人名などをみると、『創造週報』の復活とは、鄭伯奇のいう上海に集まった進歩的作家の連合であつたという話もうなずけるような気がする。またここから四・二二クーデターが与えた衝撃とそれが彼らにどう作用したかもみてとれよう。だが、この『創造週報』の復活、魯迅との合作の話も結局のところ水に流れてしまふ。いま、この間の事情について鄭伯奇や、郭沫若の回想をまとめてみると次のように考えられる。

『創造週報』の復活、魯迅との合作の話が上海で進展していたころ、成仿吾は、すでに日本に行き李初梨等と接触していた。つまり、郭沫若が「東海を越えて」でいうように、先の話は、成仿吾、さらには李初梨等、第二期創造社の同人たちには何らの相談もされないまま、成仿吾らの同意を得られるだろうとの憶測のもとにすすめられていた。郭沫若はこのことから、『創造週報』の役目はもはや終わったとして、李初梨等の主張する、創造社の「方向転換」と「無産階級革命文学の提唱」を支持し、『文化批判』の刊行を主張する成仿吾と『創造週報』の復活、魯迅との合作を考える郭沫若との間に当初「対峙の局面」があつたとのべている。そして、創造社の分裂を危惧した郭沫若が成仿吾等の意見に従つたことから、『創造週報』の復活、魯迅との合作は「流産」したというのである。だがこのことについてなら、すでにいわれているように、国共合作の崩壊、国民革命の挫折を背景にして「当時の郭沫若と成仿吾との距離は、実はそれほど大きなものではなかつた」（丸山昇『魯迅と革命文学』）とみるのが自然であろう。

鄭伯奇の回想に従えば、成仿吾が日本に向うのは、一九二七年八月十五日、郁達夫が創造社を離れて以後のことである。そして、成仿吾はすでに鄭伯奇から李初梨等の考えの概要を聞いたその上で、彼らを「新入りの軍隊」としてむかい入れるべく日本へ向つたのである。鄭伯奇は、先の回想の中で、「私が仿吾に日本に居る同志たちが無産階級文学を提唱せよという意見を主張していたと話す、仿吾はたいへん喜んだ」と記している。

〈成家注〉 成仿吾は日本へ行く前に、鄭伯奇から、日本にいる李初梨等の考えを聞いていた。しかし成仿吾は当初演劇活動を考えていた。そして九月か十月に成氏は日本へ行つた。〉

以上の経過に先立つて、一九二七年の春、鄭伯奇が日本へ行き、その後、李初梨等第二期の創造社同人たちと他の同人たちとをつなぐ、いわば「パイプ役」を果たしたことは、すでに年表に入れた通りである。成仿吾との関係でいえば、四・二二クーデター直後の広州で鄭伯奇は成仿吾に会つてゐる。鄭伯奇の回想によれば、この時、成仿吾と「以後の行動を相談し、先後して上海に行くことに決めた」という。鄭伯奇はこの後、まもなく上海に行つた。そして成仿吾が上海に来るのは、郁達夫の日記などからみて、七月の下旬のことである。

成仿吾が上海に来ると、郁達夫、鄭伯奇など、おそらくは王独清も加わつてゐたであろうが上海の創造社同人たちの間で、郁達夫がそれまで手がけていた「創造社の紊乱」の整理にからむ創造社出版部改組の問題について話し合いがもたれた。（中略）そして、郁達夫は、八月十五日、ついに創造社からの離脱を宣言するのである。

成仿吾が日本へ行くのはこの後のことである。大学在学中だから、中途で退学し帰国してくるのは不可能だろうという鄭伯奇の予想に反し、李初梨等はみな、成仿吾と相談の結果退学して帰国することを希望した。鄭伯奇の回想によれば、成仿吾はこのことを上海の郭沫若等に手紙で伝えた。鄭伯奇は、その時のことを次のように記している。

仿吾が手紙でこの知らせを私たちに伝えてくると、私たちはみな興奮し、いまかいまかという思いで彼らを待ちこがれた。沫若と私はみな、仿吾の新しい計画に同意し、それまではぐくんでいた連合の計画もそのためのらぬままに終ってしまった。

(小谷氏) 思うに、魯迅との合作がひつくりかえるこの話は十一月の下旬のころのように思われる。

〈成家注①〉 成仿吾が日本から出した手紙は、十二月になつてから出したものであろう。

〈成家注②〉 『創造週報』復活預告」は、一九二七年十二月三日の『時事新報』紙上に掲載されたのだから、小谷氏の「十一月の下旬」はあり得ない。十二月下旬でなければならぬ。小谷一郎のかんちがいか、誤植と思われる。

中井政喜はそれまでの関連記述を総括してこう述べた。(中井書193頁) おおむね妥当な見解であらう。

(第三期創造社は革命文学・無産階級革命文学を一九二八年から主張しはじめ、革命文学論争が開始される。) それ以前の段階で、成仿吾は一九二七年十月(九月のことかもしれない) 成家 上海から日本に向かい、李初梨等と会っている。

その経過は李初梨の回憶によれば、次のとおりであった。

成仿吾は先ず京都(西の都)に來て私たちと会つた後、創造社が演劇運動を起こし、脚本を書くことや演出等の事柄を計画準備していると語つた。その後彼は東京へ行き、馮乃超と会つて演劇活動の計画を作り、私たちに郵送してきた。私たちは同意しがたいと思ひ、あまり適切なことではないと思つた。そこで成仿吾・馮乃超に京都に來てもらい討議した。私たちは會議を一緒に開き、私は發言した(後に整理して、『怎樣地建設革命文学』と題して發表した)。そこで演劇活動の計画を放棄し、改めて、無産階級革命文学の提唱に従事することとし

た。(おそらく十二月になつてからのこと) 成家

(「李初梨談話記錄」、一九八〇年十二月)

成仿吾は一九二七年十二月中旬頃日本から上海に歸つた。その時すでに、郭沫若・鄭伯奇等が魯迅との協力の話を進め、魯迅の協力の承諾も得て、『創造週報』を復刊する運びとなつていた。しかし成仿吾はこれに強く反対し、先に歸国していた李初梨等の意見(無産階級革命文学の提唱)を全面的に支持主張した、と思われる。

一方、鄭伯奇によれば次のようであつた。

私たちが魯迅との連合を準備していたとき、成仿吾はまだ日本におり、私はこのことを彼に手紙で書いた。彼は不賛成だつた。彼は、旧い作家はみんなだめだ。旧い作家をすべて打倒してこそ、新しいプロレタリア文芸を樹立することができる、と考えた。(鄭伯奇談創造社左聯の一些情況、一九七七年八月)

成仿吾は回想でこう述べた。(宋彬玉、張傲卉「成仿吾和創造社」「成仿吾談話記錄」、一九八〇年九月)

郭沫若と魯迅が創造週報を復活させる啓事を發表したことは、このことは私(成仿吾)は知らなかつた。當時私は上海にゐなかつた。私たちが上海に歸つた後、みんなは週報を復活させることに不賛成であつた。郭沫若が週報を復活させようとするのは幻想だ。もしも週報を復活させるのなら、それは後退であつて前進ではない。マルクス主義を宣傳すべきなのだ。

これについて中井氏はこう言つた。

右の成仿吾の發言には、ほかの当事者の發言と比較して、いくつかの考へるべき点が見られる。

①鄭伯奇は、前出のように手紙で成仿吾に知らせた、としている。しかしこれは啓事のことに触れてゐなかつた可能性がある。復刊の啓事の發表は、一九二七年十二月三日(『創造週報』優待定戸)と思わ

れ、成仿吾は十二月三日以降に帰国したことになる。

②馮乃超はこう述べている。「私たちは確かに魯迅と連合する主張に反対しなかった、と声明しておかなければならない。私個人の記憶から言えば、私たちは帰国前後に、連合を準備しているという知らせを聞いたことがなかったし、仿吾も私たちにこのことを話さなかった。少なくともこのことについての私個人の印象はこのようなものである。」(『魯迅与創造社』、一九七八年九月)

少なくとも馮乃超にはこの間のことを知らされてはなかった、と考えられる。従って反対した「みんな」とはどの範囲の人を指すのかわからない。

しかしながら、成仿吾が国民革命の挫折後の転換期の中で、魯迅との協力に反対し、この状況に対応しうる、或いは連合しうる文学(無産階級革命文学)を追求しようとしたという点は、疑いがないと思われる。(以上、中井書の引用)

もし少し疑ってかかるなら、次のような状況もあり得ないことではない。

成仿吾が日本に行った目的の一つは、若い仲間、演劇運動を起こすべく提唱することだった。ところが、あえて成仿吾が上海にいない時期に、合作の計画が起り、あとでそれを知った成仿吾が、魯迅が加わるならいやだ、と主張し、新しい計画を持ち出して、この計画をつぶした。

こういう事情があったいじょう、この先に成仿吾と魯迅の激しい対立論戦が起くるのは必然という情勢である。次号で述べる。また、文献情報はい次回にまとめて載せる。(待続)

中国の郭沫若研究の動向——郭沫若研究国際学術研討会参加して

岩佐 昌暉

この4月13日から15日郭沫若の故郷・四川省樂山市の樂山師範大学で「中国現代歴史進展中的郭沫若国際学術研討会暨四川省郭沫若研究会第六屆會員代表大会」が開催された。主催は樂山師範学院、四川郭沫若研究会、中国郭沫若研究会、《新文学史料》編集部、会議の運営は四川郭沫若研究中心が担当した。

私も招かれて参加し、「福岡県立図書館蔵書松浦一著『文学的本質』和郭沫若」というタイトルで発表を行なった。私の報告は、郭沫若が『三葉集』の宗白華宛ての手紙であげている米国の詩人・マックス・ウェーバーの『The Moments』という立体派の詩は、松浦一(大正期の東京帝大講師。芥川龍之介も彼の文学概論を受講している)の著書『文学の本質』(大日本図書)からそっくりそのまま引用したものであるのか、という小さな「発見」を報告したものだ。

ただし、この報告で私は大きな誤りを犯していた。福岡県立図書館は郭沫若が九大に入学する三カ月前の一九一八年三月に開館し、郭沫若自身も利用していた(その体験を書いた詩「無煙煤」もある)。だが図書館は45年8月の空襲で焼失していたから、図書は残っており、私は残存する『福岡県立図書館和漢圖書分類目録』で書名の存在を確認しただけで、実際の書物は九州大学付属図書館が所蔵する旧制福岡高等学校蔵書を借り出して読み、報告を書いた。

ところが、帰国後念のため再点検したところ、目録に掲載されていたのは松浦一の別の著書(『生命の文学』大正7年刊、と『文学の白光』大正13年、第3版)だった。報告では、私は該書は県立図書館に架蔵されており、郭沫若はここでそれを読んだ、という仮説を述べていた。それが実は架蔵されていなかった。完全なる不注意、余りにも恥ずかしいミスだった。私は直ちに大会事務局に(37頁に続く)

「錐を投じた……」って？ 誤訳らしき箇所二、三

―『沫若自伝』を読む―

上野 恵司

近世以来の白話文や五四以降の現代文を読むのに、わたくしは翻訳にはなるべく頼らない。これは、いつであつたか恩師の増田涉先生から、何の本であつたか今は思い出せないが、横着をして翻訳で読んでゐるのを見とがめられて「君は中国語が読めるのだろう」と言われて以来のこと、今も務めて翻訳は避けている。

ところで、今読んでゐる『沫若自伝』だが、わたくしがこの本を読んでゐるのを知つた若い友人の某君が平凡社の東洋文庫に入つてゐる『私の幼年時代』以下の訳書全六巻をわざわざ届けてくれた。好意は謝するに余りあるが、右のような次第でこれを書架に置き放しにしていた。

そこへ、昨秋以来体調を崩して、重い内容の中国語を読むのがちよつと負担に感じられたので、禁を破つて贈られた六冊を通読してみた。

同書の訳者は、共にすでに亡くなられたが、斯界の大御所ともいふべき小野忍と丸山昇の両氏である。

さすがにこなれた訳文で、注釈も行き届いていて教えられるところが多々あつた。ただ、ところどころ「えっ」と思うような誤訳らしき箇所がいくつか目についた。例えば、

秦の始皇帝が博浪沙において錐を投じた勇士をさがしたのもかくやと思われるばかり、学校じゅうひつくり返る大騒ぎになつてしまつた。(真好像秦始皇找博浪沙投椎的勇士一样、一学堂

都闹翻了。)――三六

原文の「投椎的勇士」が、訳文では「錐を投じた勇士」とあり、「錐」の字には「きり」のルビが付されている。

「椎」の字と「錐」の字はわずかに木ヘンと金ヘンの違いだが、寡聞にして両者が通じて用いられている例を知らない。

一方、「椎」は「槌」と「鎚」となら通じる。『史記』の原文は、(張良) 東見滄海君、得力士爲鐵椎重百二十斤、秦皇帝東遊、良與客狙擊秦皇帝博浪沙中。

である。重さ百二十斤の「鉄椎」は「鉄槌」または「鉄鎚」、つまりはハンマーか砲丸状の鉄の塊と理解してよからう。百二十斤の錐(きり)は、どう考えてもあの場にそぐわない。

なお付言すれば、現代中国語音で、「椎」「槌」「鎚」はいずれも *chui*、一方「錐」は *zhui* で、前三者とは発音が異なる。

もう一つ例を挙げれば、「無常」を「無情」とするのにも気になる。

廟のお堂は非常に広くて、閻魔の塑像があり、また鶏の脚をした恐ろしい神、無情(死者を連れに来るとされている)があつた。(那庙宇很宏大、有十殿的塑像、有最可怕的鸡脚神无常。)――二二―三

「無常」、魯迅の『朝花夕拾』中の一編ともなつてゐる「無常」であつて、決して「ああ無情」の「無情」ではない。

最後に「後世畏るべし」。

孔夫子はともかくもかしこかつた、彼は「後世畏るべし」ということを知つてゐた。

正直にいつて、私自身は私がもはや二度と「畏るべき」「後世」になれぬことが残念である。五二五―五二二

原文を引くまでもなからう。「後世畏るべし」は「後生可畏」(後生畏るべし)でなければならぬ。

釣魚城―忠義祠―賢良祠について

齊藤 孝治

去る四月二日から同月二五日までの五日間、中国西南部の要衝の地、重慶に行つてまいりました。

その重慶行きは、三六
年間にわたるモンゴル軍
の釣魚城攻撃に対し一二
七九年(宋の祥光二年、
元の至元一六年)正月、
和睦の道を開いた李德輝、
熊耳夫人、王立が城内で
どのように祀られている
かを調べるのが主な目
的でした。



忠義祠、賢良祠の入口

ちなみに三人が投降の道を選んだ当時、李德輝は、意外にも敵対するモンゴル五代目の王フビライの重臣であり、安西王相兼四川枢密院副使の地位にありました。安西王相はフビライの三男安西王マンガラに関する一切の業務を扱う役所の長であり、四川枢密院は四川の北部や陝西に緊急事態が発生した場合、中央の枢密院の委託を受け、関係する業務を担う、という役所で、そこは四川の成都にありました。

熊耳夫人は李德輝の異兄妹で、幼少の頃から時折、義兄に連れられて安西王府に出入りし、王から才色兼備なところが気に入られていました。

そして年頃になると自分の衛士熊耳に嫁がせたのです。
しかしモンゴル、南宋間の戦いで熊耳が戦死し、彼女は南宋の

武将であつた王立に囚われの身になつたのです。

王立らの取り調べに対し彼女は自らの姓を「王」と称し、「私は元々、南宋の将、牛乾の妻でした。夫はモンゴル軍との戦いに敗れて殉死し、熊耳に無理やり妻にさせられたのです」と偽つたのです。

彼女の弁明をすっかり信じただけでなく、その美貌と才智を買つた王立は、彼女を釣魚城に連れて来て、その後、母親の侍女にし、周囲には自分の義妹、と言い繕つたのです。

王立は釣魚城育ちで、多くの武勳を立てた武将ながら心優しい一面も持っていた人でした。

彼が熊耳夫人を通じて成都にいる彼女の義兄、李德輝に投降の申し出を行なつたのは、一二四五年(宋の淳祐五年)のことです。

というのも一帯は、前年ほぼ一年間にわたり干ばつが続いたために農作物の収穫が極めて少なく、城内の糧秣は底をつき、中にいる約一〇万人の軍民はやせ衰え、塗炭の苦しみで喘いでいる状況でした。

こうした窮状に思い悩む王立に対して熊耳夫人は、「南宋已經滅亡、切莫拘泥於忠君的名節、眼下救民於水火、才是真正的大義」と投降を勧めたのです。

同時に王立の面子をも考え「不降旗、不收兵器、不改県誌」を投降の条件にすべきだ、とも助言しました。

これらの条件は、熊耳夫人から李德輝を経てフビライに伝えられたのです。

彼女の李德輝とやり取りは、王立の了解を取った上で花模様の付いた女性用の靴底に書状が納まる仕掛けを作り、それを使って送つた、といわれています。

李德輝がその書状をフビライに見せたのは言うまでもありません

ん。

フビライには兄モンケから「将来若攻下釣魚城・必屠殺全部軍民百姓」という遺言がありました。

しかしフビライは兄の遺言を全て守らず、王立の出した条件を認めたのです。

ところで李德輝、熊耳夫人、王立に対する評価は「国や民をモンゴルに売り渡した売国奴」とか「釣魚城内の一〇万人もの軍民を救い、一帯に平和と安泰をもたらした」などと相反する見方が喧々囂々とあつたのです。

こうした議論に輪を掛けたのは、一四九四年(明の弘治七年)、時の皇帝孝宗の強い意向を受け、釣魚城の南端に所在する護国寺の境内に忠義祠を建設、その中にモンゴルの侵攻に抵抗し戦った王堅、張珏二人だけの位牌を置き、顕彰したことにありました。

釣魚城陥落後、実に二一五年も経つてからの顕彰でした。

しかも忠義一筋の守将は、他に冉璉、冉璞兄弟、余玠もいました。

この余りにもひどい片手落ちに対し、再び人々の不満と反発が起ころのは当然でした。

このため遅ればせながら一七五九年(清の乾隆二十四年)、合州知州の王采珍は、忠義祠を改修して拡大し、冉璉、冉璞兄弟、余玠も忠義祠に奉ずることにしたのです。

その際、配慮の効く王采珍は、位牌を王堅、冉璉、余玠、冉璞、張珏の年長順にしました。

ところが一七六六年(清の乾隆三十一年)、合州吏目の陳大文は、意外にも忠義一筋の五人が祀られている本堂の左側に別室を設け、そこに王立の位牌を置き、彼を顕彰したのです。

ちなみに文中に出て来る「吏目」とは、知州の部下で、知州が刑獄の管理や文書のチェックに関する補佐官のことをいいます。

この意外な対応は、フビライの死後、六年経った一二三〇一年(元の大徳五年)、成宗チエチエンの時、王立が宋朝の復活を目指し秘かに事を謀りながら発覚、成宗から賜死を受けたことを憐れんでの措置、とされています。

さらに陳大文は、一七七九年(清の乾隆四十四年)、合州知州に出世すると、王立が祀られている別室に何と熊耳夫人、李德輝も合祀したのです。

このような大胆な策をとった陳大文は、一七七九年(清の乾隆二十七年)の進士で、最初の任務は、日本でいえば総務省の総務課長に相当する吏部の主事でした。

剛直ながら優しく真摯な気質が時の皇帝乾隆帝に重用されたのです。

合州知州を辞めた後も貴州按察使、安徽按察使、広東布政使、広東巡撫などを歴任したのです。

その際、広東巡撫時代には、南シナ海、東シナ海を横行していた海賊退治を行なったことで知られています。

その後、中央官庁に引き上げられ、一八一五年(清の嘉慶二十年)、亡くなった時には、軍事大臣にあたる兵部尚書でした。

そしてまた、一八八二年(清の光緒七年)、次の合州知州の華国英は、王立ら三人が祀られている別室を整備し、「賢良祠」と名付けて、忠義祠とは区別しました。

この三人の顕彰について、国立重慶師範大学の管維良元教授も「モンゴルとの戦いで犠牲が多かったのも事実ですが、重要なのは国が残った、ということです。現に今現在、中華人民共和国という立派な国が存在しているではないですか。それに時代が遠くなればなるほど事の認識は変わって行くものですよ」と分析し、褒めています。

ところでこの釣魚城投降には、日本に多大な余波がありました。

早くも釣魚城投降の当日、フビライは余勢を買って揚州（江蘇省揚州市）、湖州（現同省湖州市）などの造船業者に対して戦艦の製造を命じたのです。

それは五年前の一二七四年（宋の咸淳十年、元の至元十一年、日本の文永十一年）、フビライの命令一下、二万五千人から成るモンゴル、高麗の連合軍が対馬、壱岐を侵し、一部は博多湾に上陸したものの、両国船は暴風雨により転覆、敗退したいわゆる文永の役の復讐戦への準備でもあったのです。

この時、フビライは高麗に対しても兵の派遣と一千隻もの戦船用巨船の造船を命じています。

新元史には、フビライのこの命令を「元在揚州、湖州等地造船、準備攻日本」と書かれています。

我が国では鎌倉幕府の時代で龜山天皇の下、執権北条時宗が絶対的な権力を握っていた時でした。

もともと時宗は、すでにモンゴルの日本侵攻を十分、予測していました。

というのも文永の役以前とはいえ、一二六〇年（元の中統元年、日本の文応元年）、次のような高圧的な書状を日本国王、つまり龜山天皇に対し送っていたからです。

「上天眷命（けんめい）、大蒙古国の皇帝、書を日本国王に奉（たてまつ）る。……高麗（こうらい）は朕（みづか）ちんの東藩なり。日本は高麗に密邇（みつじ）し、開国以来、亦（また）時に中国に通ず。朕の躬（み）に至つて、一乗（いちじょう）の使も以つて和好を通ずること無し、尚ほ恐る、王の国これを知ること未だ審（つまびらか）ならざらん。故に特に使を遣はし、書を持して朕の志を布告せしむ。冀（こ）いねがわくは今より以往、通問結好し、以つて相親睦せん。……」

ちなみにこの書状は、今現在も東大寺尊勝院に保存されています。

さらにフビライは、日本のモンゴルへの服属を強要する使者を二回も送っていました。

一回目は、文永の役の一年後のことで、使者は杜世忠ら五人です。

彼らが鎌倉への入口である相模の龍の口（現藤沢市片瀬）に到着すると、時宗は部下に命じ、全員を斬殺したのです。

二回目は、釣魚城投降の年にあたる一二七九年（元の至元十六年、日本の弘安二年）のことであり、使者は周福、鸞中の二人でした。

だが彼らは博多に着くなり時宗の命で斬り殺されたのです。

当然のことながら時宗は、モンゴルの襲来が必至、と見做しました。

しかしながらすでに時宗は、文永の役の後、菊地氏など九州の武家集団、いわゆるご家人に対し「異国警固番役」の元、博多など筑紫地方の沿岸に石造りの堡壘を造らせるなど厳重に警戒を固めさせていたのです。

この堡壘造りは、鎌倉時代が終わる頃まで続きました。

時宗自身も自分の指を切つて血を出し、その血で金剛経と円覚経を書き、この二つのお経を中国から渡来して来ていた南宋の禅僧、無学祖元に読経してもらい、モンゴル打倒を祈念していたのです。

案の定、一二八一年（元の至元十八年、日本の弘安四年）、モンゴルと高麗の連合軍は一四万人もの大軍を擁し、東路軍（モンゴルと高麗の連合軍）、江南軍（モンゴル軍のみ）の二手に分かれ、大半が博多湾から上陸しましたが、この時も暴風雨や台風に遭い、壊滅し、一部の兵は本国に逃げ帰りました。

この二回目の襲来は、弘安の役、といいますが、中国の歴史書には、同時に高麗船が対馬を襲撃した、という史実も書かれています。

このように釣魚城投降と日本へのモンゴル襲来は、間違いなく連動していたのです。

こうした状況もあり、筆者は、釣魚城の現状、とりわけ忠義祠と賢良祠が今現在、どうなっているかを知ろうと二〇一六年一〇月と翌二〇一七年六月、現地に出向き、直接、取材を行なったのです。

だが忠義祠と賢良祠に関しては、釣魚城はもとより重慶市図書館、三峡博物館、国立重慶師範大学などにまわりましたが、いずれも「空振り」に終わりました。

一部の方々は「文化大革命の際、全て破壊され尽くされていたのではないですか」という返事が返ってきました。

ところが幸運なことに今回の取材では、忠義祠、賢良祠とも釣魚城内に大切に保護されており、十分、調べることが出来ました。

詳細に説明しますと、重慶に到着した翌四月二十日午前九時半、重慶の中心地にあるホテルからハイウェイを使い、一時間がかりで釣魚城に到着しました。

前年、前年の釣魚城の取材で釣魚城の地理についてはある程度わかっていたので、今回は裏門から中に入り、李德輝、王立、熊耳夫人三人を祀つてある祠を探すことにしたのです。

ところが裏門一帯は鬱蒼とした雑木と竹の林が茂るほか、急勾配の階段が長々と続き、手



昼なお暗くしている
釣魚城の竹林

掛かりが全くありませんでした。
「万事休す」と取材を諦め、ゆうに百メートルはある階段を上り、ホテルに戻るになりました。

息を切らしながら階段を上りきり、通りに出ると、右側に「護国門」と刻した石製の門があったのです。

疲労困憊していましたが、案内役に「ひと踏ん張りして行ってみましょう」と誘われたこともあり、一四段程ある階段を上りきると、そこに三層から成る立派な門がありました。一層は石造りで入口があり、二層、三層は木造だったのです。

中に入るとすぐ正面に「護国寺」があり、その左側に苔むした無人の家がありました。

本堂の前に所在なげに立っている老僧に「ここに熊耳夫人のお位牌がありますか」と尋ねると、老僧は左手の無人の家を指さし「あの建物の中にありますよ」と無造作に答えてくれました。

朗報に喜びはひとしおでした。

中に入ると、建物は二つに仕切られ、右側の部屋には右から王堅、冉璉、余玠、冉璞、張珏の順に戒名のない位牌があり、その上部に各人の絵が付いていました。

さらに位牌の下段には、

各々電灯式、蠟燭式の灯籠

があり、電灯式の灯籠にはすでに灯りが点いていました。そしてまたその脇にはリング、バナナなどの果物も供えてあったのです。

加えて位牌の上段には「忠義千秋」と記された横額が全体を覆



忠義祠に祀られている王堅
冉璉、余玠、冉璞、張珏

うように配置してありました。

まさにそこが「忠義祠」だったのです。

歩を移して仕切られた左側の部屋に入ると、右から李徳輝、王立、熊耳夫人の順に祀られていました。

位牌などの仏具は忠義祠と全く同じでした。

仏の世界では、差別、区別がないことを見事に具示していたのです。

さすがに「忠義千秋」という横額だけはありませんでした。

このことは、そこが「賢良祠」なことを示していたのです。

忠義祠、賢良祠共通して強く印象に残ったのは①塵一つないのではないかと感じるほど清潔なこと②存在を示す広告や案内書がなく、商業主義を感じられないことでした。

すでに夕刻近くになっていましたが、清々しさを残して釣魚城を去ったのです。

最後になりますが、郭沫若もモンゴルの釣魚城攻略や二度にわたる日本襲来については、強い関心を持っていました。

九大時代、モンゴル襲来に備えて筑紫海岸に造られた堡壘を視察したり、末弟の開運に前記に関する資料の採取を依頼したりしていたのです。また一九五五年一二月、中国の学術団を引き連れ一八年ぶりに



外から見た忠義祠、賢良祠が入っている建物



李徳輝、王立、熊耳夫人の位牌

来日し、早稲田大学で中日文化交流について講演した際、「中日間の長い歴史の中で六七〇余年前、モンゴルのフビライは大量の動員をかけて日本に対し侵略を行ない、日本に迷惑をかけたが、日本も最近数十年間、外国の植民地主義を真似て中日両国に莫大な災難を及ぼしました。我々は、この過去の不愉快な出来事を忘れることなく、これからは愉快な思い出を残しましょう」と述べ、学生の拍手を受けていました。

この時の警句は、日中関係が落ち着かない今日、他山の石にするべきだと思います。(敬称略)

参考文献

- ・新元史
- ・清史稿
- ・中日古代帝王年号及大事対照表 李寅生編 四川辞書出版社
- ・随郭沫若戦後訪日 劉徳有著 遼寧人民出版社
- ・郭沫若年譜 上 龔繼民、方仁念著 天津人民出版社
- ・清末大事編年 吳鉄峰著 湖南大学出版社
- ・日本史必修用語辞典 木村茂光編著 文英堂
- ・中国の歴史4、5 陳舜臣著 講談社
- ・南宋政治史概説 宮崎市定著 白揚社
- ・世界史人名辞典 水村光男編 山川出版社
- ・シュトゥルム・ウント・ドラंक 疾風怒涛 上 齊藤孝治著

シュトゥルム・ウント・ドラंक編集出版委員会

『女神』への新たなアプローチ

武 継 平

昨年十月の下旬、本書の書評を新聞社から頼まれたとき、正直一瞬躊躇した。というのは、本はまだ読んでいないし、そして三六〇ページもの研究書の書評を注文の二〇〇〇字以内で書けるか、と一抹の不安があったからだ。

とはいえ、わたくしも「創造社同人と日本」というテーマに関する研究に取り組んできた研究者の一人として、これまでは郭沫若が日本と関わりを持っていた二〇年間、特に日本留学の一〇年間（一九一四―一九二四）の在日留学生生活や文学活動について調査研究を行ってきたし、公刊される他の研究者の著書や論文も入手可能な限り読むようにはしている。

さて、では、本題に移って本書の内容を見てみよう。

まず著者の問題意識だが、それは「日本留学と亡命という二つの時期」の「郭沫若と日本との関係」を明らかにしたいということである。目次をみると、本書は少年時代、日本留学時代、古典文学の素養と古典詩創作、『女神』の世界、小説創作の試み、日本へ亡命、亡命期の作品、日本——第二の故郷、という八つの章から構成されている。

構成だけ見てみると、八章それぞれ分量のばらつきがまず印象に残った。『女神』の世界の一〇七ページもあるのに対して、「日本へ亡命」の章は一七ページしかない。構成上のバランスからみて、本書の重きは亡命期というよりも明らかに留学期に置かれており、そして研究の重点は同時期に書かれた『女神』にあると思わずにはいられなかった。

『女神』は郭沫若の処女詩集である。中国『五四』新文学の構築に大きく貢献した先駆的な作品として位置付けられており、中国現代文学史の発展に強い影響力をもつエポックメイキングな作品としても従来不動の評価を受けている。しかし、このような『女神』は従来様々な原因で創作環境や郭沫若の留学生生活と切り離して論じられてきた。言い換えれば、研究対象者の自伝、または研究者の想像や分析、そして推論などを基にして構築されたものが殆どだったと言わなければならない。対して本書の狙いは、主に比較文学の研究手法を駆使し、大正文化の中で育まれ、博多湾で生まれた『女神』と日本文学および西欧近代文学との関係性の解明に挑み、そして独自な見解を見出そうとするとところにあると思われる。

言ってみれば、「郭沫若と日本の二十年」というのはもはや新鮮な研究課題ではない。しかも日中両国の学界では、過去には「郭学」および「ポスト郭学」研究の実証的な先行研究の実績がある。特に「ポスト郭学」ともいえるべき研究の成果として、蔡震氏の『文化越境の旅——日本に二十年もいた郭沫若』（文化芸術出版社二〇〇五）では、北京郭沫若記念館という地の利を得て、秘蔵資料の数々が掘り起こされおかげで明らかになった史実も多々あったのである。そして、手前味噌で恐縮だが、若き留学生詩人郭沫若の人間像や『女神』創作時のエキゾチックな心象風景の解明などに努めた拙著『異文化のなかの郭沫若——日本留学の時代』（九州大学出版会二〇〇二）もこのような先行研究の一つと言えるよう。

本書が、このような先行研究の滋養を吸収したことはいうまでもない。では、本書ならではの学術面の貢献は何だろうか。ズバリいわせてもらおうと、本書は待望の「亡命期の郭沫若」研究において文化交流の視点で新たな史実を一部明らかにしたものの、学術的価値という観点からみて、総じていえばやはり『女神』論が

最も異彩を放っていると言えよう。そしてそれがまた研究者のパソコンナリティーを最も反映し、しかも本書一番の見どころだと言わねばならない。

本書の『女神』論の最大な特徴は、研究視野の広さと研究方法駆使の柔軟さにあると言いたい。そこが特に評価に値すると思っている。西洋絵画の視覚的效果と郭沫若の作詩との関連づけといい、作品から滲み出る詩人の生命観や宇宙観などに対して行なった物理学的、また解剖学的な分析といい、まさに「得心応手」と言えなくもない。論者の雄弁ぶりに思わず脱帽する。さらに、詩論の展開も近代西洋美学の受容から東西両洋哲学の観照まで実に幅広い。噛めば噛むほど味のあるものだと思っている。

最後に、本書の遺憾な点に率直に触れる形で筆者の希望を書いておこう。

本書では、郭沫若が日本に関わった二つの時期（留学期と亡命期）の研究という比較的幅のあるテーマを掲げている。しかし、なぜか亡命期に関するものは少なかった。一九二八―一九三七という亡命の一〇年間においては、郭沫若は文学者としては鳴りを潜めていたが、考古学、歴史学および中国古代文字研究の領域では前人未踏の域に到達している。ところが、極端にいえば、革命家、歴史学者、考古学者という複雑な要素を統合した存在である亡命期の郭沫若に関する研究はまだ第一歩も踏み出していない。その一〇年の歴史的事実を検証するには、新たに学際的な研究方法が必要になってくるかもしれない。が、ともかく課題は多からう。当該分野に関しては、一次資料の欠如が原因か、日中両国の郭沫若研が足を踏み入れることができなかった過去があるだけに今後この分野における著者の実り多い研究を期待したい。

（なお、小文は二〇一八年一月二〇日付の『図書新聞』に掲載された同題の書評に加筆したものである。―筆者）

（29頁から続く）このことを報告して謝罪し、報告集から私の報告を事後的であつても削除してほしいことと、このメールを全参加者に転送してほしいことを依頼した。やりとりがあつて、最終的に事務局は私の要求を諒とされ、その通りに処置された。いくつかの反響があつたが、それは書かない。単純な見誤りと、それをチェックしなかつた研究者としての怠慢が引き起こした恥ずかしい誤りで、今後の教訓にしたいと思っている。

さて、参加記を書くつもりが横道に逸れた。残り僅かな字数だが、大会の報告集を読んだ感想を記して、中途半端な参加記を終えたい。

前日配布された分厚い『会議報告集』を拾い読みして驚いた。発表の多くが、対象を絞り、その対象に実証的な検討を加えた、ある意味で読みごたえのある堅実な議論だったからである。中国における文学研究が、抽象的で大きな（ある意味で空疎な）理論研究から、個別の対象に対する具体的な実証研究に移りつつあることは、私もこの十年くらいの趨勢として感じていたことだ。だが、その風潮がここまで広がる、逆に昔が懐かしくなり、自分の発表を棚にあげて、もう少し「大理論」を展開してよ、と言いたくなるから勝手なものである。

それらの中で私が強い印象を受けたのが王学東の「海外郭沫若研究的歴史と現状―訪中国郭沫若研究会執行会長蔡震」だった。タイトル通り、王学東・西華大学教授による蔡震会長へのインタビューの記録である。この中で蔡震氏は日本の郭沫若研究の長所として実証主義をあげた上で、その「不足之處」としてこう指摘していた。

「たとえば、彼らは時にある極めて小さな歴史の細部をこまごまと微細な点に至るまで考証します。だが、その細部に史的価値があるかどうかは問いません。これはいささか考証の「やりすぎ」ではないでしょうか」

蔡震氏の指摘はやや極端だが、われわれの研究への頂門の一針である。同時に中国の研究の未来への警告のようにも聞こえたのだ。

新刊紹介——林甘泉・蔡震主編『郭沫若年譜長編（1892～1978年）』全5巻 中国社会科学出版社、二〇一七年十月刊



かねて編集集中だった

郭沫若年譜の決定版

『郭沫若年譜長編（1892～1978）』

全5巻が、二〇一七年十月刊行された。社会科学学院の「A類重大課題」として申請してから印刷に付すまで十年の時間を経たと「後記」に書かれている。

林甘泉（元中国社会科学院歴史研究所所長・中国郭沫若研究会会長）と蔡震（中国郭沫若研究会前会長）を主編とし、執筆は秦川、魏紅珊、黃淳浩、蔡震、趙凱、翟清福、楊志清、李曉虹、鍾作英、趙笑潔、梁雪松、郭平英らが各年度の事項を分担執筆、41～48年部分は李斌が初稿の修改を行なった。また歴史部分は謝保成、古文字、考古部分は王世民が執筆、全体を林甘泉、蔡震、謝保成が通読、監閲した（「後記」による）。中国社会科学院歴史研究所北京郭沫若記念館が蓄積する一次資料を駆使し、館外の専門家の助力を得ながら、まさに総力戦で編んだ年譜であることが分かる。

総ページ数は2358頁、巨冊である。第1巻は誕生から四〇歳の一九三二年まで、第2巻は33年から五〇歳になった42年まで、以下第3巻、52年六〇歳まで。第4巻62年、七〇歳まで。第5巻が、逝去の78年までにそれぞれ振り分けられている。出生から逝去の年まで、毎年の記述に精粗なく、生涯の活動が辿れる。

特にすごいのが日常活動の記録のいちいちに全て記述の根拠となる資料が付せられている点である。「後記」に「これまでに収集できた郭沫若に関するあらゆる文献史料およびそれと関係ある」その他の歴史資料に基づき「郭沫若の一生の経歴、活動、創作、著述、翻訳、思想の発展変化、交友関係を、全面的に、真実に、詳細に記述することが、われわれが最初から確定していた編集方針だった」と書かれているが、それがほぼ実現されている。

また、創作、著述、翻訳などは、単に「某月某日 小説「○○」を「△△」雑誌に発表」とだけ書くのではなく、その概要や執筆意図のようなものまで原文を引用して付している。例えば、20年1月6日の項「夜、小説『他』を書く。24日上海『時事新報・学灯』に発表。三人の人間が街角で出会ったこと、こました出来事を十数行の文字で描いたに過ぎない。題名に「近頃、西欧の文芸では短編小説が流行している。短いものでは十二、三行のものまである。ぼくのこの一編も小説の価値があるだろうか？」とある。」

その前日5日には詩『三個Panteyism』を『学灯』に発表。題名英文は「誤り、Pantheistsとすべし」とある。詩が莊子、スピノザ、カピールの3人の汎神論者を賛美した詩、と説明したあと、21年8月『女神』初版本に収められ、後「三個汎神論者」と題名をかえ「郭沫若文集」第1巻に収載、今は『全集・文学編』第1巻に入っていると説明している。どの作品にもこのような書誌的解説が加えられており、作品事典の役割も兼ねている。

また原文の引用には紙面を費やすことを厭わない。長い場合は一頁をこえることもざらである。例えば21年1月の項に見える李石岑に宛てた手紙、いま『全集・文学編』第15巻所収の「論詩三札」、などその例である。

以上、駆け足で見えてきたが、このような年譜の出現が、郭沫若研究を大いに進展させることは間違いない。これまで、あの

本を開き、この雑誌をのぞき、時間をかけて図書館に通い、大変な手間をかけてやっと探し当てたような資料を、この本は手掛りさえ知っていれば、さっと示してくれるのである。役にたつ。だが、私のような怠け者でも、そういう手間がまた楽しみでもある。

手間かけることで知識が身についたような気にもなる。『郭沫若年譜長編』はそうした楽しみを減らすことになる。だが、もう一つ確かなことは、私が今後この年譜をせつせと引き出し、それを楽しみと感じ始めるだろうことである。 価格は788円。

なお、主編の一人・林甘泉先生は年譜刊行の二〇一七年十月逝去された。ご冥福をお祈りする。 (岩佐 昌暉)

編集後記

■ 訃報である。鈴木義昭元早稲田大学教授が亡くなられた。去年の5月のことだという。鈴木さんは郭沫若研究から研究活動を始められた。本会のホームページ掲載の「日本における郭沫若『女神』研究」では、鈴木さんの研究を紹介して「70年代に『女神』研究を推進したのは鈴木義昭である」と、高い評価を与えている。後には聞一多の研究に傾注され、郭沫若から離れられたが、長期にわたり本会会員として活動を支えていただいた。ご冥福をお祈りする。

■ 前号のお詫びである。「成家徹郎」氏の名を前号の執筆者紹介で「哲郎」としてしまった。成家さんから注意を受けた。入力時の変換ミスだが、気がつかなかった。お詫びします。

■ 次は今号のお詫びである。発行が1カ月も遅れてしまった。締め切りを守って早くから原稿を頂いた方には、大変申し訳ないことである。今号の発行が遅れたのは、主に、予告にも書いたが郭沫若は周作人に宛てて出したハガキの扱いで方針がぐらついた

ためだった。研究会発起人たちと相談して次号を特集号とするこ
とで、ようやく、今号発行の運びとなった。

次号は定時に発行できるよう頑張りたい。(編集部)

本号執筆者紹介(掲載順)

松宮貴之(まつみや たかゆき) 書家・西安培華学院客員教授

廖 久明(りよう きゆうめい) 梁山師範学院教授・四川郭沫若研

究中心主任

新谷秀明(しんたに ひであき) 西南学院大学教授

成家徹郎(なりけ てつろう) 大東文化大学人文科学研究所

岩佐昌暉(いわさ まさあき) 九州大学名誉教授

上野恵司(うえの けいじ) 日本中国語検定協会理事長・共立女子

大学名誉教授

斉藤孝治(さいとう こうじ) 著述家・中日文化研究所所長

武継平(ぶ けいへい) 福岡県立女子大学教授

郭沫若研究会報 第19号

発行日 二〇一八年七月二〇日

発行所 日本郭沫若研究会事務局

〒八一〇・〇〇三二福岡市中央区谷二・二〇・八・三二岩佐方

TEL 〇九二・七二五・二五五四 (FAX 兼用)

メールアドレス japankakuken@gmail.com

ホームページ <http://www.tb.biglobe.ne.jp/~guomoruo/>

印刷 コロニー印刷(社会福祉法人 福岡コロニー)